地球輝甲シャインダーク

ふるうつ盆地

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
地球輝甲シャインダーク

【Ｎコード】
Ｎ０５６８Ｈ

【作者名】
ふるうつ盆地

【あらすじ】
「もう、消えてしまいたい」「じゃ、消してあげよっか？」彼を日常から連れ出したのは、イチゴ柄のパンツも眩しい魔女だった。何の因果か変身ヒーロー、スペースデブリを回収ついでに、地球の環境改善だ？パロディ満載、宇宙刑事復活希望な、魔法変身ヒーロー熱血ＳＦ、何気に開幕。

第1話　宇宙へ輝けニューヒーロー！　勝利のポーズはV？！（前書き）

この小説には、『変身ヒーロー』が含まれます。
この小説には、『現代魔法』も含まれます。
なにげに、『機動戦士ガイア・ギア』がほんのり香ります。
実は『ハーレムもの』かもしれません。
でも、基本は『熱血』です（予定）。
読むだけで『エコ』になる可能性すらあります。

第1話　宇宙へ輝けニューヒーロー！　勝利のポーズはV？！

消えてしまいたい――跡形もなく、誰にも迷惑をかけず、まるで空気にとけ込むように。

瞼を閉じても、肌を突き刺す陽の光は闇を与えてくれず、風の止んだ午後の公園で、司馬春告（しばはるつぐ）は両手を広げて顔を覆いながら、強く願った。

香るはずの薫風もない五月の陽気は、晩春ではなく盛夏を思わせるほどに、濃くて強い。カッターシャツ越しに背中を刺激する芝生の感触には慣れても、地面から立ち上る蒸し暑い草いきれが、寝心地のよかった午前のそれと違って、春告を責め立てる。

明日から、どうするのか？

平日の公園に一人、朝から寝ころんで春告は、生まれて初めてのサボタージュへの後悔を覚えながら、

「このまま、消えたい」

本音が、こぼれた。

「では、消してやろうかの？」

「！」

返事は期待していなかった。

むしろ、眼を閉じるまで、周囲に人の気配など感じられなかった。

声の方向は頭上。聞こえたのは、甲高い音色に無邪気と幼さを残しながらも、教養と自信に満ちた大人の風格ある響き。

「なん……」

思わず目を開ければ、視界に飛び込んできた白い柱が二本。それらが上方に真っ赤な傘をまとって、イチゴ柄の純白の三角形の元に合流していた。

（パンツッ！）

思考が沸騰する。

（い、今更こんなベタな展開っていうか、こういうのは幼なじみと

かそういう存在が屋上に呼びに来たときに発生するものであって、そうじゃなきゃ廊下の角で見知らぬ他人にぶつかった時の最悪のファーストインパクトくらいが関の山っていうか、僕の人生、有り難みがなくなるほどのパンモロとは縁がないっていうか、ぶっちゃけこんな近距離で女の子のパンツを見たのは幼稚園以来っていうか……）

「気に入らなかったかの？」

思考は一秒。瞬き一回。

「！」

見るまい、と視線を逸らそうとした春告は、そこに有りうべからざる存在を認め、今度は一切の遠慮をかなぐり捨てて、頭上の存在を凝視した。

（なぜ、ブルマ！）

すでに春告世代では、言い伝えに残る古の体操着であるはずの紺色の三角地帯が、わずか瞬き一つの時間に、少女の下半身を神々しく輝かせ、

（あ、はみ出……じゃなくてっ！）

その驚きは、数時間起きあがる気力を失っていた春告の上半身を、バネ仕掛けのように勢いよく飛び跳ねさせ、

「君は、誰？」

起き上がって尚、頭上にある相手の顔は、逆行の中、想像以上に幼い小学校高学年の少女の面形で、

「本心から消えたいのなら、手伝うぞ？」

言い訳するなら、この時、春告はその人生において、最低のモチベーション状態にあった。

いわゆる、軽い鬱だった。

故に彼が、その少女の口元に浮かんだ笑みを、妖艶な魔女のそれではなく、天使の慈愛のそれと勘違いをしてしまったことを、一体誰が責められようか。

そして、春告がどう答えたのか……。

「肝心な所を、忘れているよなぁ」
また、あの日のことを思い出してしまった。
（いや、彼女のパンツを思い出したかったわけじゃなく）
けれど、あの出会いから数ヶ月。
まったく様変わりしてしまった生活を思うに、どうしても数日に一度は、あの日の魔女との契約にまで、原因を遡るという習慣から抜け出せない。
なぜなら、今現在、司馬春告がいる場所が場所だからである。
成層圏。
低軌道（高度約三五十キロメートル～千キロメートル）。
限りなく宇宙に近い場所。
かつてユーリィ・ガガーリンが「地球は青いヴェールをまとった花嫁のようだった」と言い、ともかくもわずか半世紀の内に、膨大な量の地球資産が打ち上げられては使い捨てられ、今やスペースデブリと呼ばれる殺傷性の極めて高い質量兵器が跳梁跋扈する魔窟。
そんな場所に、彼は、ただポツンと、生身でいる。
生身と言っても、裸ではない。
大気というフィルターを通過していない太陽光は強すぎて、直に浴びればどんな障害が起きるか検討もつかず、それでなくても、そこは宇宙で真空で絶対零度である。
故に、司馬春告は、白く輝く宇宙服っぽいものを、身にまとっていた。
宇宙服。いや、それは服と言うには、あまりにも輝きすぎていた。
四肢は少年のように細く、全体のシルエットは肩をいからせVラインを描くように鋭く、等身大のその姿を鏡で初めて見た春告は、
「メタルヒーロー」
いわゆる、子供向けの特撮ヒーロー番組の主人公のようなスーツ

だと、思わざるを得なかった。
ただし、そのガイアギアと呼ばれるスーツが特撮ヒーロー達と違うのは、ウィルゲムと呼ばれる特殊な宝石の力を使って顕現している、魔術的な何かである、という一点だ。
魔術。
そう、あの日春告にブルマという絶滅種を目の当たりにさせた赤いスカートを穿いてた女の子は、魔術使い――魔女だったのだ。
夢野此花（こはな）、外見年齢十一歳。
それは春告を誘拐した極悪犯の名前であり、春告にガイアギアを託して仕事を与えてくれる雇い主の名前であり、春告が現在の生活を送っているアパートの家主の名前だった。
春告が宇宙に浮かんでいるのは、道楽でも観光でも罰ゲームでも宇宙追放刑でもなく、おそらく世界中で彼だけしか出来ないであろう『仕事』を、魔術的な力を駆使して遂行するためなのだ。
その仕事とは、スペースデブリ、および大気圏突入の危険性のある地球近傍天体の排除。
スペースデブリとは、言うなれば宇宙空間に捨てられた、ゴミ。ロケット打ち上げに際して廃棄された燃料タンクや、耐用年数が過ぎてお役ごめんになった人工衛星、および破壊もしくは破損によってぶちまけられた破片などなど。
それらは、宇宙空間という極めて大気の薄い場所を、秒速数キロ以上という尋常でない速度で飛び回っており……この世界が物理法則に支配されている限り、物質の持つエネルギーは、その速度の二乗に比例して……ゆえにどんな小さな物体であっても、超高速で動くものはすべて、宇宙船を簡単にスクラップに化す攻撃力を持っている。
重ねて言うが、人類が宇宙に進出して半世紀あまり。
その間に生産されたスペースデブリは、数千トンとも言われている。
広大な宇宙空間だからと言っても、実は軌道投入に最適な部分は

限られていて、静止軌道などはすでに飽和状態に近い。
当然のことながらスペースデブリも、過去の打ち上げなどの軌道付近を超高速で飛び回っている可能性が高く……人類は、自分で自分の首を絞めるがごとく、大気の向こうに目に見えない小さな弾丸を無数にばらまいたも同然であり、現に国際宇宙ステーションも、甚大な被害こそ受けていないものの、ミリ単位の微笑デブリの衝突は、もはや日常茶飯事と考えられている。
もちろん、中には重力に引かれて、大気との摩擦熱で燃え尽きるものも多数ある。
そしてある程度視認できる大きなデブリは、夜間を通して全世界で監視され、その軌道なども解析されてカタログ化されている。
だが問題は、重力にも引かれず、視認も出来ない小さな破片が壊滅的な被害を叩き出す可能性があることであり……現時点においてどの宇宙機構も、スペースデブリへの根本的な対策、つまり宇宙の掃除を実施していない。
宇宙開発関係者にとってみれば、スペースデブリの回収のような仕事は、百害あって一理なし……ぶっちゃけてしまえば、経済的に大赤字。
以上のことを耳にタコができるまで夢野此花に教え込まれた春告は、疑問も質問も許されずに問答無用で大気圏外に送り出され、魔術を駆使して宇宙を掃除するというボランティアに従事している。
作業自体は、驚くほど単調だ。
地上にいるナビゲーターから送られてくる情報を元に、魔術的な力で対象を補足。あとはそれを破壊するか、大気圏に突入させるかを判断して、『念じ』る。
そうすれば、ガイアギアを構成している十粒のウィルゲムが、春告の『願い』を増幅変換して、力として顕現。『願い』に準じた結果をもたらすという魔術。
今日という日の三時間だけでも、数十個の微少デブリを処理した春告は、すでにベテランの域に達している。

（と言っても、同業者いないけど）
正直、疑問はいっぱいだ。
どうして春告なのか。
いったい此花は何者なのか。
どうして魔術を利用して、宇宙の掃除なんてしなければならないのか。
そもそも、魔術ってアリなのか。
だが現実として、魔術を駆使して宇宙を飛び回り、デブリの掃除にそれなりのやり甲斐を感じ始めているのも事実で。
（馴染みすぎだろ）
理由はある。
極めて単純な理由が。
ここには、他人がいないからだ。
誰の目も、気にする必要がない。
地上のナビゲーターからの指示があるとは言え、彼女は無言の指示を送るだけで、春告の行動には一切関知しようとしない。
故に一応のノルマはあっても、彼の行動自体は驚くほど自由であり、ほぼ半日を誰とも会話しないという生活ながらも、それを好ましいと思ってしまう嗜好が、春告にはあった。
人間には個性があると言いながら、ある特定のイメージの人間を是とする社会通念は、そのイメージから外れた人間を、異物もしくは劣等種という見方をする風習が、日本という社会には根強くある。
だとして、持って生まれた性格を、ねじ曲げてでも社会に迎合できる者もいれば、不器用であるが故に、社会の期待に対応できないものも、多数存在する。
司馬春告は、他人とのコミュニケーションを極めて忌避するという性格において現代社会に合っておらず……そんな彼の思考を理解する者も、周囲には皆無だった。
そうしたよくある不幸が、結果的にあの日の追い込まれた春告を生む原因となり……なんの因果か彼は、最も好ましい環境に、失踪

という最悪な手段でたどり着いた。
そう、彼はいまだ、失踪扱い。
夢野此花によって、携帯電話は初日に物理的に破壊され、それ以外の一切の過去への接触も、厳しく禁止されたからだ。
「消えるって言うことは、そういうことじゃろう？」
詐欺だと思った。
それほどの覚悟を求めるならば、なぜ一番最初にきつく警告してくれなかったのか。
「言ったら、迷ったであろ？」
それは当たり前だ。
「迷ったら人間、今まで通りの生活を選ぶものじゃ……ハルはあのまま、地獄の底に沈んでデッドエンド。
どうせ死ぬ命なら、拾って有効活用されたほうが、マシであろ？」
夢野此花に口喧嘩を挑むのは、無謀というより無理だった。
彼女は魔女だ。
物理法則ですら『願い』でねじ曲げる魔術を駆使する、現代の魔女。
「あ、勘違いされる前に言っておくがの、わしの魔術は、科学と魔法の融合なんていう紛い物じゃないからの。
科学は科学。
魔術は魔術。
コインの表と裏には、それぞれ表としてのプライドと、裏としてのプライドがあるからな、勝手に一緒くたにするのは無礼というものじゃ」
春告が何か疑問を挟もうものなら、まったく関係ない方向から一方的に責められる。
結果的に、彼は彼女に屈した。
過去を振り返らず、日々を疑問に思わず、ただ淡々と求められた仕事を、黙々とこなし続けて。
（ま、少なくとも、この景色を堪能できるわけだし）

宇宙から見下ろす地球の美しさに、春告は飽きるということがなかった。
極地域を覆うオーロラや、赤道付近で大成長する積乱雲……夜の部分で地上を輝かせる都市の光、人の手に触れずにただ延々と広がる大草原……。
対して地球を背にすれば、宝石を散りばめたような、という形容にあてはまる星の海が果てしなく広がっている。
命綱もなく、その広大というには陳腐すぎる無限の空間を、春告は縦横無尽に動き回られるという特権を駆使して、思う存分羽をのばしている。
（結局、此花に逆らってまで家に連絡しないのは……今の暮らしをそれなりに、気に入ってるからなんだろうな）
母は、心配しているのだろうか？
自信がない。
少なくとも、通っていた高校の裏サイトを見た限りでは、春告の失踪は同情を誘うものではなく、笑い飛ばされて翌日には興味を失われる程度の扱いでしかなく……春告は以降、そのサイトを巡回先から削除した。
（駄目だ。考えるな）
この思考は、下向きの螺旋。
考えれば考えるほど、自己嫌悪のスパイラルが始まることは、過去に何百回と繰り返してきた愚考だから、その始まりの段階で断ち切る術を、今の春告は知っていた。
（自分を追いつめてまで、乗り越えなきゃいけない課題なんて、ないんだ）
そう此花は、春告に諭した。
「勝ち目のない戦を挑んだって仕方がないじゃろう。
ハルがどれだけ頑張ろうと、誰も誉めてなどくれんし、正当な評価を下してもくれない。
結果を出そうと、歯を食いしばろうと、それを評価してくれん場

所では、ゼロと一緒じゃ。
いつまでもそんな場所にしがみついて消耗する前に、ちゃんと自分を必要として、評価してくれる場所に移動した方が、結果的にみんな幸せになれるもんじゃ」
それが、彼女が、春告を前の生活から失踪させた根本の理由だった。
「社会全体を変えたって、あそこでのハルに、幸せなんてなかったからの」
そうだろうな、と、理屈ではなく感情で理解してしまったから、春告は今日も真面目に、宇宙の掃除に励んでいる。
『作戦開始三十分前』
と、網膜投影式モニターの片隅に、ナビゲーターの涼代薺（すずしろなずな）からの指示が映し出される。
（了解）
彼女からの指示はいつも一方通行で、春告には受諾の意志を返す権利もない。
それでも仕事に支障をきたさないのは、彼女の指示が的確で無駄がないことも去ることながら、お互いが言葉を交わすことなく、姿を見ることすらなしで、信頼しあっているからだろうと、春告は勝手に妄想していた。
（というか、本当に薺っていう人間がいるのかどうかすら、怪しいんだけど）
薺のことを此花から紹介されたのは、失踪二日目のこと。
『涼代』というプレートがかけられた扉の前で、一方的に名乗らされ、
「彼女、恥ずかしがり屋だからさ。この部屋から出られないんだよね」
「せめて、声くらい、聞けないの？」
「何か用事があったら、ドアの下からメモを滑らせるように」
「いや、せめてメールとか」

「以上。これから仲良くするように」
一方的だった。とは言え、夢野此花のする事が、一方的でなかった試しがないのだけれど。
そしてそれから数ヶ月、今に至るも春告は、涼代薺という同年代の少女を、その目で確認したことがない。
共有のトイレや風呂でバッティングするという嬉し恥ずかしトラブルどころか、声すら聞いたことがなく、唯一その部屋に何かがいるらしいという証拠が、三食の食事が消費されていることと、食器トレーの上にたまに『購入希望』と書かれたメモ用紙が置いてあることくらいで。
故に春告が薺個人について知っていることと言えば、イチゴ味の菓子が好きなくせに生の苺が嫌いと言うことと、時々薬局に買いにいかされる生理用品の商品名と、世の中にＢＬなる知らなくても生きていけた世界があって、その世界で消費される印刷物群が、高校生の財布にとっては少しばかり高価であり、どうやら表紙の絵柄や題名から察するに、それが同性愛を描いた成人指定の内容であり、薺がどのような絵柄の好みを持っているかということを、十数冊に及ぶ証拠物件から推測してしまったこと、くらいで。
果たして、彼女がどんな髪型で、どんな目をしていて、鼻の形も唇の色も知らず、背丈もスリーサイズも論外で、
（本当は此花の作った、魔術的な人工知能ってオチじゃないだろうな）
と、実は今でも疑っているものの、それでも開かれたところを知らない扉の向こうに、何がしかの存在を感じ取ってしまっているのも、事実なわけであり。
（ま、準備しよう）
作戦、という硬質な単語の響きに反して、春告がこれから行うことは、いつもの延長線上に過ぎない。
（目標が、ターゲットマーカーに入ったら、トリガー）
ただ今回の目標が、ちょっとばかりいつもより大きくて派手なこ

とに、作戦という名前の意義がある。
此花曰く、ツングースカ爆発を引き起こしたのと同サイズの小惑星。
直径にして三十メートルほどの大きさの天体が、秒速八キロという猛スピードで、三十分後に地球へ最接近するという。
その距離、地表から約五万キロ。
当然、ツングースカ爆発のように、大気圏に突入して森一つを吹き飛ばすような危険性は、警告されていない。
だったら、放って置いてもいいんじゃないのか、という質問は、当然のように即座に却下された。
「絵的に面白いからな」
実行するのは春告である。
結局春告の抗議は取り上げられず、五十年後のニアミスの危機を回避するために、今日この場所で、少なくとも今後千年は接近しない程度に、相手の軌道をずらすことになったわけで。
「破壊しないの？」
「破壊なんてしたら、デブリを増やす危険があるじゃろ」
……問答無用の軌道変更だってどんな影響が出るのか分かったものでなかったが、此花の言動を学習済みの春告は、それ以上の反論を諦めて、そして今、ここいる。
まだ一万キロ以上彼方にある目標は、黙視できない。試しに光学ズームで目標を補足しても、数多の星粒の一つとしか、認識できなかった。
この宇宙にありふれた、塵に等しい小天体。
もし大気圏に突入すれば、途中で燃え尽きることなく、上手くいって海洋へ、次に運が良ければ無人の広野で空中爆発……最悪の事態で、都市部にてクレーター爆誕。
現在確認されているだけでも、四千個強の地球近傍小天体の一つ。
まだ発見から二日しか経っておらず、地上のどの宇宙機構も対応できずに傍観するしかない存在。

名前すらないその天体が、今回地球へ衝突しなかったのは、気まぐれ以外の何者でもない。
そんな危機が、この宇宙にはありふれている。
ただの一個で、全生命を脅かせられる……数千年に一度の確率で訪れる、この宇宙では極めてありふれた小天体。
（試しに、核ミサイル基地とかに落としてみたら、面白いんじゃね？）
たった一人の気まぐれに、全地球的な破壊力すら与えてくれる、ありふれた小天体。
そう、この地球を脅かすに、巨大なものなんて必要ない。
たった百メートル。
この太陽系に飛び交っている、数え切れないほどの小天体のたった一つ。
そんな程度の物で、春告の足下に輝いている世界は、脅かされる。
そんな脆弱な世界を……破壊してしまっても構わないと思っている自分が、内深くに確かに、居る。
「あ～、ハル？」
珍しい。此花から、『量子力学的な通信』が届く。通常の無線装置を搭載していないガイアギアは、魔術的な通信装置を有していない相手とは、交信できないようになっている。
「力を発揮するときにな、格好良いポーズで頼むわ。レフトハンド隠し銃的な」
「えらく具体的な要求で」
「ボルテ〇カ的でも良いんだが、そのスーツ、展開しないからの」
「古典的に、スペシウ〇光線とか駄目ですか」
「その格好でシルバーレッドな宇宙人の必殺技は似合わんな」
ま、実際、何かの光線っぽいものが発射されるわけじゃない。
力の調整など、複雑な操作は全てウィルゲムと呼ばれる宝石群が自動で行ってくれる。春告が小天体に発する力も、『名状しがたい斥力的なもの』であって、なんらかの破壊を目的としたものじゃな

い。
「ま、ハルの好みにまかせた」
「シュビビ〇ムとか叫ぶよ？」
「……ハル、年齢詐称してるだろ」
「それが分かる此花に言われたくない」
しかし、決めポーズの要請とは。夢野此花の思考の突飛さは今に始まったことではないけれど、相変わらず目的が不明だ。
（ま、やるけどね）
幼少時には、誰もが真似した、テレビの向こうの正義の味方。その必殺技ポーズは、三つ子の魂なんとやら、春告の筋肉の中にまだ、メモリーされて再現可能だ。
かくして、きっちり時間通りに、春告は仕事を遂行した。
此花にきつく、「格好良いポーズで」と念を押されたにも関わらず、あえて恥ずかしいネタポーズで。
彼のガイアギアが、Ｖの字を彷彿とさせるシルエットをしていたが故に。
……わずか二日後に、春告は自分の軽率な行いを、激しく後悔することになる。
よりによって、六七億人が閲覧可能な、インターネットの画面を前にして。

司馬春告の朝は早い、というより、日の出と同時。
既に盛夏。もしくは猛夏。畑仕事は涼しい内に行わないと、地獄の出汗責めに遭う。
かくして、アパートの隣にある畑で夏野菜の手入れをし、春告が入居するまで、「魔女だから」といった理由でピザばかり食していた女人たちに成り代わって、旬の野菜を洗って切ってサラダにした栄養バランスの取れた料理をこしらえて。

そのまま宇宙へ『出勤』することもあれば、たまには大気圏に留まって、魔術的な方法で二酸化炭素だけを大気中から濾しとるボランティアに奉仕したり。

ちなみにそうして集めた二酸化炭素は、特殊な装置でエタノールに変換したり、ドライアイスとして売りに出したり、ビニールハウスで植物の成長促進実験に使ったりと、存外色々活用されて、時には供給を需要が上回る日すらあり、意外にも週の半分は、二酸化炭素の回収作業を余儀なくされる。

その上、ほとんど毎日宇宙の掃除もしていれば、仕事の終わりは自然と夕方になってしまい、夕食の支度も春告の仕事となれば……下手な専業主婦よりも忙しい生活だ。

おかげで余分なことを考えなくて済むという効果もあるけれど、たまにはノンビリごろごろしたい程、分刻みのスケジュールは、特に真夏には厳しすぎて。

それでも、学校での飼い殺しのような生活よりはマシだと、日々充実という名の幸福を噛みしめていた春告は、夕食後、不意に此花に手招きされた。

嫌な予感しかしない。

「我ながら、会心の作でなぁ」

見た目、かわいらしい十一歳。実年齢不詳の魔女の『会心』が、春告にとっての『痛恨』であった例は十指に余る。

「また、何の悪巧みで？」

既に見る前から警戒態勢に入っている春告が、此花の指さす先に見た物は、居間に設置されている公共パソコンのモニターで、その画面には彼もよく利用している、無料の動画投稿サイト、『ニカニカ動画』が表示されていた。

「……宇宙の、さきもり？」

「うつのもりびと！　ワザワザ守人をさきもりって読むな、このマニア！」

「宇宙を、うつって読ませるそっちの方がネタ古いだろ！」

軽い応酬はともかくとして、そこには誰かが投稿したであろう、『宇宙の守人』と題した投稿動画が、すでに読み込まれて再生スタンバイしていた。
春告の眼球が素早く動き、投稿者のコメントとおぼしき文字列を読みとる。
「アマチュア特撮番組？　地球の平和は宇宙から……成層圏の平和を守る新ヒーロー、シャインダークの活躍を、刮目すべしって、まさかっ！」
「そ、うぷ主わし」
「何考えてんだよ！」
「まぁまぁ。評価は見てのお楽しみ」
春告の抗議も聞き流し、此花は神速でマウスを左クリック。
画面が切り替わってフルサイズで展開された動画は、宇宙の映像を背景に、主人公たるシャインダークの紹介から始まった。
「これ、スターウ〇ーズじゃん？」
音源がもろパクリだった。
というか、下画面いっぱいに現れては、画面上中央部へ三角形に吸い込まれていくスクロール方法まで、まるっきり同じだった。
「まぁ、今時分、フリーソフトでこのくらいのスクロール作れるし」
……いくら無料公開のアマチュア作品とは言え、著作権法上問題じゃあるまいか。
「あ、突っ込まれてる」
春告の心配は、他人も同じらしい。『ニカニカ動画』の特色として、動画の進行にリアルタイムにコメントを付けられるシステムがあり、春告同様のツッコミが、早くも笑い顔と同時に複数寄せられていた。
「でも、クオリティ高いじゃろ？」
今時、パソコンで動画を編集するくらいは誰にでも片手間で出来る時代だが、それ故にコンピューターのスペックに左右されない『人間のセンス』が、映像作品の出来不出来に多大な影響を与える。

そういう意味では此花が投稿したこの作品は、画質も綺麗で、音も悪くなく……自然な編集で切り替わった画面に、自身のガイアギアが上半身アップ、ちょい下から撮したアングルで現れた瞬間、春告は開いた口が塞がらなかった。

（いつの間に！）

背景の地球の鮮明さから、その画像が宇宙で撮られたものであろうことは、合成痕があるかないかに関わらず、毎日のように見ている春告ならでは、一発で見抜いた。

デザインフォントで堂々と描かれた『宇宙の守人』の文字がファンファーレと共に起きあがって来たかと思うと、どこかで聞いたことのあるオープニングテーマが、最近では聞き馴染んでしまって「これはこれでアリかな」と思えるようになってしまった、『サイヴォーカル』なる歌声シンセサイザーの鈴音ミキの流暢な発声を乗せて、

「まずいっしょ！　ていうか、『銀河列車９８７で行こう』の、鉄王がカッコいいバージョンの主題歌じゃん！」

「いやぁ、さすがに一から主題歌作ってる余裕無くてさぁ。ま、仮主題歌ってことで」

春告のツッコミを待つまでもなく、すでに画面は他の視聴者からのツッコミコメントで埋まっている。

『なんという神調教　主人公鉄王　もう三次元歌手いらね　金髪腹黒ヒロイン希望』

「出オチすぎる……」

「いっそ、メーテ〇的な何かを用意しとく？」

此花なら放っておけば、宇宙空間で噴煙を上げる石炭機関車くらいノリノリで用意するだろうが、

「んなことより！」

問題なのは、宇宙空間をバックに、微少デブリを次々に叩き落とす、『シャインダーク』と命名された春告の動画が全世界に向けて配信されていることで。

「何やってんの！」
「弾幕薄い？」
「じゃなくて！」
春告が指さすモニター上では、早くも主人公であろう『シャインダーク』に対して、そのスーツの精巧さと、特撮とは思えない背景画像に対して、『なんというプロ合成　スーツ気合い入りすぎ　地球すげぇ　無重力ってＣＧ？』などなど、掴みなネタのオープニングテーマでの笑いから一転、あまりに精巧すぎる画像へのコメントが寄せられていて。
「バレたらどうすんの！」
「このくらいで身元まで判明せんて。ＩＤだって偽名で登録してるしの。せっかく『正義の味方』しとるんじゃから、みんなに知ってもらいたいじゃろ？」
その間にもオープニングが終了し、テロップと、どこかで聞いたことのある声のナレーションを背景に、シャインダークの動画は続く。
ストーリー的な流れは無く、無法地帯と化したスペースデブリあふれる宇宙と、高尚なスローガンだけが声高に叫ばれながら、実質急速に悪化している地球温暖化を憂いて、単身上空の浄化に勤める様子が、聞いているだけで血がたぎってくるような、熱血系なアニメーションのサウンドトラックに乗せて流れていく。
それは、編集の妙というほかない。
シャインダークの動きはＢＧＭと見事な連携をしていて、ある意味プロモーションビデオの完成度を誇っていたし、ナレーションを担当する此花の声も、素人ながら抑揚ある喋りで、こちらも無意味なくらいに熱く台詞を吠え上げる。
そして短いながらも濃い内容は、最終的に地球へ衝突する小天体を迎え撃つという流れになり、
「ま・さ・か！」
どこかのゲーム画面から挿入されたとおぼしき、テラ連盟艦隊な

る宇宙戦艦が、何故か無数の小惑星の襲来で撃墜されていくなかで、
「今こそ、解き放て！
全ガイアエナジーを結集した、シャインダーク最大の必殺技！
シャイニング・ビクトリー・ブレイカァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァァ！」
暑苦しい台詞に乗せて、両腕を斜めに広げて『Ｖの字』を描いたシャインダークの股間の紳士部分から、野太いレーザービームが放たれる瞬間を、春告は見た。
（その発想は無かったわ！）
今こそ、あの時の此花の指示が納得いく。
栄えある第一話のクライマックス部分を、格好良い絵面で占めたかった演出者の意図を。
だが春告は、当然こんな結末を予想しておらず、自分の外観から想起したある漫画キャラクターを笑いネタとしてチョイスして……
「いやぁ、ここでオチを持ってくるとは。ある意味ギャグとしても売れるかものぅ！」
そして流れるエンディングテーマは、春告が選択したキャラクターの持ち歌たる『ヴェリーメロン大賛歌』であり……視聴者のコメントは皆、賛否両論、最後の最後の大オチに、全面笑いの嵐で第一話は幕を閉じたのだった。
「で、どうよ。会心の作だったじゃろ？」
痛恨の一撃だった。
今すぐ死にたくなった。
よりによって映像デビューが、あんなネタ動画になってしまうなんて。
「鬱だ……死のう」
「まて、こら！」
振り返って部屋に籠もろうとした春告の膝裏に、此花のつま先が突き刺さる。カクンと姿勢を崩した春告に飛びついた此花は、全体重を彼の首に回した両手に込めて、春告を見事に床に沈めた。

「せめて、食器の片づけをしろ」
「その程度なんだ、僕の命！」
「あと、まだデザート食べてない」
「かき氷くらい自分で作れるっしょ！　てか、暑いよ！」
両手両足でしがみついていた此花を引き剥がして、
「なんで、やる前に説明してくんなかったのさ」
泣きそうな声で、春告が問う。
「だって、相談したら反対したじゃろ？」
当たり前だ。
「世の中、反対ばっかじゃ、上昇せんぞ？
とりあえずやってみる、チャレンジ精神を持たねばの」
「それ、悪徳宗教の常套句だから」
騙されたと思って飲んでみ、と勧められて飲んだのが薬物だったりしたら手遅れだ。
「というか、何が目的なの？」
「ん～、エンターテインメントの提供？　もしくは同人映像から、一躍メディアミックスの雄として成り上がるとか」
「ま・じ・め・に」
タンクトップに短パン姿な此花は、床の上に胡座をかいて言い訳を練り始める。
年齢設定が微妙なために、色んなところが膨らみかけで目のやり場に困る春告は、改めて先ほどの動画を始めから再生して……意外に、視聴者の反応が良いことに驚いていた。
「続編希望が多い」
「じゃろ？」
心の隙間に、此花が喜んで跳びついてくる。
「んでの、今度はもっと、カメラ映えするポーズでよろしく」
「調子に乗るな！」
顔を突き出して春告の肩に顎を乗せてきた此花の、額に手刀を一発。

せめてそのくらいの反撃で、
「苺氷、作ってくる」
「薺、苺嫌いだろ？」
「だから、どう返してくるのか、興味がある」
「ハル、根、暗ぁ」
「うるさいよ」
食器を片づけ、人数分のデザートを作り、いつものように『涼代』のプレートが掛かった二階の部屋にデザートを運んで、春告は薺の部屋の前に置かれた夕食のプレートに、いつものようにメモ用紙が置かれているのを目撃した。
『あのポーズは無い』
辛辣なまでの批評だった。
（というか、ネット環境あるなら、せめてメールくらい使ってくれよ）
なぜ、今のご時世に筆談なのか。
「薺、デザート置いておくから」
なぜ、此花と一緒にいるのか。
なぜ、部屋から出てこられないのか。
もしかして、薺もまた春告と同じように、社会から弾かれてしまった経験があるのか……。
お互いに知っていることは、あまりにも少ない。
それでも春告は、数少ない彼女の情報の一つである『苺嫌い』をネタに、はたして苺をカキ氷に混ぜ込んで練乳を垂らした苺氷をどう返してくるか、コミュニケーションを試みてみた。
（普通に食べて返してきたりしてなぁ）
その様子を見ることも叶わないけれど。
春告は綺麗に食べ終わっている夕食のプレートを受け取って、むさ苦しい熱気のこもる夏の夜の廊下を、それでもどこか晴れた心で、ゆっくりと進んでいった。階段を下りる途中、扉の開く音が聞こえ、デザートが持ち上げられるのを、微かに背中に感じながら。

第2話　衝撃！　南海に散るヒーロー？　赤熱化は三倍の奇跡を生む？！

明朝。
執念の結晶である、丹念に取り分けられた苺の種子……つまり、外周部の粒々のみが集められた器が、春告（はるつぐ）の手元にはあった。
『厳命』と力強い筆跡で書かれたメモ用紙には、
「今度からは粒を残らず除去すること」
薺（なずな）のこだわりが明記してあった。
「良かったの。食べてくれて」
「いや、いじめでしょ、これ」
「あの子も陰湿だからのぉ」
薺の『返答』にケラケラと此花（こはな）が笑っていると、
「ただいま〜」
声は一つに、足音が二種類、玄関の方から一直線に居間に向かって歩いてくる。
「おかえりぃ。お疲れ！」
ピシッと右手を挙げて此花が出迎えたのは、対照的な二人の乙女だ。
安桜草香（あさくらそうか）と唐守（からすま）ふきの。唐守は春告と同じようにガイアギアを有するオペレーターであり、安桜は唐守をサポートするナビゲーターである。
「お疲れさま。朝飯、すぐ用意するから」
二人の帰還を待っていた春告は、冷蔵庫から生野菜のサラダを取り出し、一人分の食パンをトースターに入れた。同時に味噌汁を暖め直しながら、ベーコンエッグの調理に入る。
このアパートの住人は、朝食の和食派と洋食派が混在しており、どちらかが折れるという選択肢は存在していなかった。
それこそ、春告が来るまで、朝食の準備を巡って拳が拳を呼ぶ殺伐とした空気が漂っていたらしく、冗談抜きで夕食の残りのピザが

飛び交ったという。
特に唐守ふきのの暴れっぷりは尋常ではなく、深夜パトロールという勤めの疲れもあって、元々が肉体派の彼女が拳に訴えるのが常道だった。
その唐守ふきの、帰ってくるなりTシャツを脱ぎ捨て、短パンを蹴り跳ばし、下着姿で椅子の上に胡座かき……薺は別としてこの館内で、最も正しく女性として発育している彼女には、情操が著しく欠如していた。
最初にそんな姿に直面した春告は、彼女の胸の谷間やら、豊満すぎて左右につぶれた尻肉などにいちいち反応したものだが、同時に固く引き締まった二の腕やふくらはぎ、六つに分かれた腹筋なども丸見えで……おまけに相手に恥じらいが一切ないことから、色々と冷めた。
こういう人種だ。
見切りをつけてしまえば、精巧な美術品が動いているとでも思えば、目のやり場に困る以前に、相手を凝視するような事もなくなった。
そんな唐守と一緒にいる安桜草香は……そんなことを本人に言えば、トイレに入る直前にトイレットペーパーを全部隠されたり、夏場なのに風呂の設定温度をマックスにされたり、部屋にこっそり蚊の羽音の音源を仕込んで寝苦しい夜を更に寝苦しくする等の陰湿かつ効果的な仕返しを実行されること確実なのだが……同僚に全部持っていかれたんじゃないだろうかと思うほど、色々と、細い。
骨と皮、と言ってしまうと貧相なイメージになってしまうのだが、それでも儚いというプラス印象を喚起させられるのは、彼女の身体のパーツがいちいち小ぶりに出来ているからだろう。
黙っていれば、お人形さんみたいで可愛い……ただし基本無口な彼女は、黙ったままで蹴りを入れてくるから……動かなければ、お人形さんみたいで可愛い部類だ。
「どうだった、今日の首尾は？」

あっけらかんと、此花が訪ねれば、
「まぁ、上々。いつものコンビニ連中けちらして、廃屋の暴行現場を二件押さえて、買春現場に踏み込んで……酔っぱらいを三人川に投げ込んで、あと児童虐待の現行犯を半殺しにしたくらい」
「それはそれは。お疲れさまです」
春告のシャインダークが宇宙の平和を守るとしたら、ふきののガイアギアは、夜の街の悪を叩く、地域密着型ヒーローだ。
特に法では叩きにくい、家庭内暴力などを精力的に撲滅に回り……その苛烈なやり口から警察に指名手配を食らっているほどだが、少なくとも日本の警察には、彼女たちを止める力はない。
「ハルがシャインダークなら、さしずめオレは夜王（ナイトライダー）ってとこ？」
前振り伏線飛び越えて、いきなり本題が浮上する。
「ふきのは撮ってないよ」
「差別なっ！」
「だって、ふきのを撮ったら、ロケ地から身元割れまくりじゃん」
「そこは、あれだ！　モザイクと音声変換でごまかして」
「あんた。モザイク職人の苦労を知らないからそう言うけど……」
徹夜明けでフルスロットルなふきのに合わせて、此花の口も回る回る。螺旋を描いてどんどん話題がずれていく二人を無視して、草香は黙々と食パンの耳をちぎって目玉焼きの半熟黄身を浸して食べる作業に没頭している。
「あ～、ハル」
ふきの用のどんぶり飯を用意していた春告に、珍しく草香が話しかけた。
「次は、Ｉで」
「何の話？」
「人文字」
一方的にそれだけ告げると、草香は黄身を吸い尽くしたベーコンエッグを食パンに挟んで……そのまま会話を打ち切った。
Ｖの次がＩ……ビクトリーとでも続けろと言いたいのか？

食事に没頭すると聴覚を閉鎖してしまう草香に確認する術はなく、とりあえず彼の動画はそれなりに、住民たちに受け入れられているらしいことを知る。
「あ、ハル。今日は赤道方面によろしく」
今の今まで騒いでいた此花が、不意打ちで春告に矛先を向けた。
「赤道？　わざわざ？」
大気圏内で二酸化炭素を収集するだけなら、別に国内でも問題ないはずである。
「うん。衛星写真に、気になる影があるんだよねぇ」
（魔のトライアングルにでも飛ばされるんだろうか）
此花ならあり得ないとは言い切れず、春告の胸に不安の雲が急速に膨らんでいった。

心配は杞憂に終わり、春告は常夏の熱帯地域、赤道直下の紺碧の海上へと、その身を飛ばしていた。
魔術的に『飛ぶ』とは、ウィルゲムのコントローラーである『カドゥケウス』を通して、各鉱石に蓄えられている数億年の知識をフル活用した結果、『斥力発生』もしくは『重力波制御』、『ミノ〇スキー粒子（未知）が立方格子を形成して電気的な斥力で疑似重力制御』の、いずれかの方式で成るのが普通だと説明されていた。発現の分岐点は、用いる鉱石の種類と、その並べ方で多様なバリエーションがあり、実際に飛んでいる春告でも、一体自分がどういった原理で空に浮いているのかは説明できない。
ただ、『飛ぶ』と念じた。
その念を受けて、十粒のウィルゲムが応じた。
それが魔術と呼ばれる機構の肝であり、ウィルゲムに認められた者しか力を発現できないからこそ、条件さえ整えば『誰でも』利用可能という科学の定義とは隔絶している。

宝石に気に入られた特定の人物が用いることができる超常の現象。
母なる星、『ＧＡＩＡ』の結晶として生まれ、幾度もの氷河期や温暖期を経て、何度かの小惑星の落下を聞き、動く大陸に乗って時には遙かな地下から地上へと旅を続けて人の手に渡る宝石たち。
ウィルゲムとは、俗に言うパワーストーンの中でも、特に強いＷＩＬＬ（意志）を持ったＧＥＭ（宝石）の事を指す。
夢野此花曰く、
「人間と石の関係は、人間が『ゴッド』を想像する遙か昔から続いておる。
人間と猿の分化が、モノリスになくても、石という道具の利用にあるのは明白。
そんな時代から、人間は石を頼り、石に助けられ、その声に耳を傾け、その意志を尊重して、生活の全てを石に依存して、その意志に導かれてきた。
この星に、『ＧＡＩＡ』なる超常の意志があるのかどうかは知らん。
けれど神話が生まれるよりもずっと前から、人間は石の力を熟知して、活用してきたから発展できたことに、異論は認めぬ。
魔術とは、文字通り『悪魔の術』。
けれど、『悪魔』という概念は、キリスト教という『作品』の『裏設定』に過ぎぬ。
彼らが魔術と呼んだのは、あくまで彼らの『世界設定』から外れた技であったからじゃ。
そして民間療法として古くから語り継がれてきた魔女たちの技は……ゴッドではなく大地母神たるＧＡＩＡを根底にしたアニミズムだったからこそ、異端と見なされ排斥されたのよ。
石を媒介し、石に頼り、石に認められることこそが、人間を人間たらしめ、今の生活を導いた、正統な神の御技であったことを忘れての。
地球創世の太古より成り、無数の知恵をその身に宿したウィルゲ

ム以上の知嚢なんて、この地球には存在せぬ。
だから、自信を持て、ハル。
そなたは、ＧＡＩＡの意志に認められた、発現者なのじゃから…
…」
ガイア理論なる、地球を一個の生命体とみなす考え方があることは、春告も言葉だけは知っていた。けれどもそれは、複雑すぎる自然機構が現在の環境設定で均衡を保っている奇跡を、生物のもつ『恒常性』になぞらえたシステム論であって、ＧＡＩＡなる意志を認めたわけではない。
此花も、その点については、ウィルゲム固有の意志は認めても、地球そのものの意志との接続については明言しなかった。
「ＧＡＩＡねぇ」
今、春告の眼前には海があり、空がある。水と、そして酸素と二酸化炭素と窒素が満ち、それぞれは誰に頼まれたのかも分からないまま循環して、現状維持という奇跡を当たり前のように続けている。
そのシステムが、あたかも一個の生物であるかのように美しいことに、春告も異論はない。
そして生物の由来を、宇宙からの飛来物に求めていた従来の学説と反対に、地球固有の発生であると仮定したことにも、理屈ではなく感情で納得できる。
けれど、だからと言って、ＧＡＩＡという生命体が意志を持ち、ウィルゲムという結晶を通して人間に助力してきたとする此花の論説には、いまいち首肯しかねていた。
もちろん、今現在春告が空を飛んでいる理屈を、それ以外の何かで置換することも、彼には無理なのだけれど。
「ここら、だよな」
ＧＰＳで現在の座標を確認しながら、春告は周囲の観察に意識を向けた。
洋上は強い貿易風の煽りをうけて波打ち、見渡す限り蒼き海が煌めいている。直上より降り注ぐ太陽光に温められ、勢いよく上昇し

ているであろう水蒸気の流れにのって天を突くほどに成長した入道雲の群も、彼の脳裏にあった南洋のイメージ通りに、白く、気高く、雄々しい。
「此花、一応目標空域に到着したけど？」
春告のガイアギアが見ている光景は、遙か日本にあるアパートでもモニターされていて、必要があれば薺や此花のツッコミが容赦なく襲ってくる。
「待て、今付近の人工衛星にハッキングしておる」
いっそ、自分が高度一万メートルまで上昇しようかとも考えたが、その遙か上空にある静止衛星から送られてきた画像による指示の方が、早く春告の耳に届く。
「そこから風下に移動して……問題の物は、海洋を漂っているはずじゃ」
漂っている？
此花が情報を隠しているのはいつもの事なので、余計な質問は挟まずに春告は現場に直行した。
目指す方角には、先ほど感嘆した入道雲の列塔が高々と空を占めている。
春告は海洋に漂っているという何かを見つけるために、高度を低く、海面を舐めるように風を切った。飛び魚かイルカでも一緒に飛んでくれようかというほどの低空飛行に、残念ながら追随してくれるモノはいない。
「？」
やがて、異景が視界に滑り込む。
入道雲を門として、果たしてその向こうの世界は、まるで異海であるかのように、まがまがしくも闇一色に染まっていたのだ。
それが、延々と遙か彼方まで続いている雲のせいだと気づいた春告は、影色濃い灰色の海原のそこかしこに、竜巻と見紛う気流の柱が散乱しているのを見た。それらも近づくにつれて輪郭がハッキリと見えてきて、竜巻にしては穏やかなその動きの根元に、人工物で

あろう白き物体が浮かんでいる。
「ヘリコプター？」
入道雲直下のスコールのカーテンを抜けて、自らも雲海の影の領域に入り込み、最寄りの蒸気源の異形を観察する。
全体が白く塗装された巨大な船だった。帆柱の代わりに三本の塔が立ち並び、外周にフィンを巻き付けたその柱が、ゆっくりと回転している。
春告がヘリコプターと呼んだのは、その塔の形状が、歴史の教科書などで見た、レオナルド・ダ・ヴィンチの描いた螺旋形状の空飛ぶ機構の設計図に、酷似していたからだ。
その緩やかに回転しているレオナルド塔（仮）の塔頂からは、春告が竜巻と見間違えた、霧が勢いよく立ち上がっている。その霧の柱は途切れることなく真上の雲に直結しており、どうやらこの船舶が、上空の雲の製造装置の役割を果たしているらしいと想像した。
船舶には、人の姿がない。
「春告、念のため、降りてみ」
「もし、誰か中にいたら？」
「全力で逃げぃ」
人事だと思って、と心中でため息をつきながら、春告は慎重にレオナルド塔（仮）に近づいていった。
予想以上に、大きい。
樹齢何百年という巨木を思わせる存在感で、十メートルを超える塔が、ドリルを連想させる螺旋状に取り巻いているフィンをゆっくりと回転させながら、空に霧を吐いている。
船上に降り立った春告からは、人間が操作するのに必要な設備が見つからなかった。五十メートルを越えるだろう全長の甲板を歩いて、メンテナンス用であろうハッチをようやく見つける。
「不法侵入に、なるよなぁ」
「とっとと、入れ」
鍵はかかっていなかった。不用心だと思いながら、光のない船内

に滑り込む。真っ暗な船内に、開かれたハッチからの光だけが輝いている。明らかに、人の存在を無視した設計だった。塔が回っている音だけが船体に阻まれてこもっていて、時折水の流れる音が、微かに足下から伝わってくる。
「海水を汲み上げておるの」
「何のために？」
「そりゃ、雲を作るためじゃろ。ハル、今度は雲の上じゃ」
入ったばっかなのに！　と憤っても意味がない。春告はメンテナンスハッチを丁寧に閉めると、塔の回転に巻き込まれないように気をつけながら、霧の柱に沿うように空を登っていく。
直上の雲は、粒が細かかった。
（パウダースノウ？）
直感の感想が、それに近い。
ベタつくような重さのない小さな水滴が、空をミッチリと埋めていて、それが想像以上に濃い影を海上に落としている。
雲海は、薄かった。
（眩しっ！）
赤道直下の強光を跳ね返して、雲上は爆発しているかと思うほど輝いていた。目が眩む光圧に、頭部のバイザーが自動的に遮光モードに移行する。雲そのものが発光しているかと思うほどの輝きは、予想通り地平線の彼方まで続いていた。グルリと四方を見回せば、雲海の終端に、もれなく入道雲の山脈が立ちはだかっている。まるで、盆地だった。入道雲に周囲を取り巻かれた、沸騰するように白熱している雲原。
宇宙から見たら、さぞかし強烈な光を放っているであろう雲海を飛び回りながら、これほどの存在にも関わらず、今まで気にならなかったことに違和感を覚えた。
「これ、なんなの？　どこかの国の実験か何か？」
「国家単位じゃない。かといって国連でもない。あらゆる法を無視した、極めて悪質な個人的実験じゃよ」

「個人的？」
此花の口調は断定的で、しかも怒気が含まれていた。
（裏事情を知っている？）
「新手のソーラーレイとか？」
「風に流される軍事兵器って有用か？」
「軍事衛星の盗撮防止とか」
「敷設が海上限定じゃろ」
「わざと雲を作って、畑に雨を降らせるっていうの、中国で実用してなかったっけ？」
「これは逆じゃ……この雲は、雨を降らせない雲での」
此花が、やたらと諸性能に詳しい理由を、春告は一瞬考えてみた。
「ひょっとして、此花が作ったとか？」
「わしは初期設計しただけじゃ！」
図星だった。
「で、一体全体、なにが目的なわけ？」
珍しく、春告は強気になって畳みかけた。この先あるかないかという自分のターンに、酔っていたのかもしれない。
「ハルのくせに生意気な！
口動かす暇があったら、もっかい雲の下に潜って、あの船を二三隻、強奪してこい！」
……此花の図星は逆鱗であることを、春告は自分の鼓膜を痛めて実感した。

此花曰く、これほどの巨大建造物を運ぶには、今の春告の装備では出力に乏しいらしい。
海上に出た春告が一番最初に指示されたのは、カドゥケウスという魔術発生機構にはめ込まれているウィルゲムの交換だった。
春告のガイアギアの発現には、十粒のウィルゲムを必要とする。

雲製造船（仮）に降り立って、一度変身を解いた春告は、自信の胸元にペンダントのように下がっているカドゥケウスを持ち上げた。
春告のそれは、いわゆるペンタグラム、五芒星を描いている。正五角形の各辺に、三角形を五個付け足した、その五頂点と五交点には、十粒の宝石が輝いていた。
固有の意志を持つウィルゲムと、そのウィルゲムの力を繋げる回路であるパスによって構成されたカドゥケウス。
ウィルゲムの一つ一つには固有の仕事が与えられ、全体で春告の『願い』を、現実に干渉する『力』に変える。
春告のそれは、その形状から、セーマンパスと呼ばれる規格のものだった。基本外の五点が力の発現を受け持ち、中の正五角形が力の制御を担当する回路らしい。
春告は言われるままに、ノイズを除去する瑪瑙（めのう）と、様々なエフェクタを担当する琥珀（こはく）で出来たウィルゲムを外して、同時に最終的な力の発生を受け持つ日長石（にっちょうせき）のウィルゲムを、一つから三つに増やした。そうすることで雑念が増え、細かい調整も不可能になるが、春告と雲製造船（仮）を浮上させるのに十分な出力が得られるらしい。
「で、どうするの、この船？」
回路に新たなウィルゲムを組み込んで、春告は念じることで一瞬でガイアギアを発現させる。
「とりあえず、北極へ持ってけ」
「北極！」
とんでもない事を言われた。
直線で行っても六千キロ超。
正確な排水量は知らないけど、百トンは下らないだろう船舶を二つも受け持って、六千キロ。
「なんのために」
春告が生身で持ち上げるわけではないとは言え、その力の発生源が春告にあることは明白である。オペレーターの志気が如実に出力に反映される魔術は、主に精神的疲労が大きい。これだけの物を長

距離運搬するためには、それなりに志気を高揚させるだけの理由が欲しかった。
燃える心は天でも突き破るが、萎えた心じゃ箸も持てない。それが、春告が変身しているガイアギアの特徴なのだ。
「大ヒントをやろう。雨の降らない雲の下、どうなると思う？」
「そんなの……曇るだけじゃないの？」
「じゃから、曇りの日だと、下はどうなるかと聞いとる！」
当然の受け答えに逆ギレされた。一体此花はなにを企んで、こんな大仰な物を設計したというのか。
雲。影。日光を遮るもの……世界の色彩を乏しくさせ、植物の光合成を邪魔して、地上の気温上昇を妨げ……「寒くなる？」
「ビンゴじゃ！」
此花は、海水噴霧によって作られた雲が、その太陽光反射能の大きさによって、下界を寒冷化させるのだと説明した。
「なんのために？」
「地球温暖化が問題だったから、工学的に冷やす方法を考案しただけじゃよ」
「それを、どうして、北極に持っていく必要があるわけ？　それに、そういう目的なら、別に邪道でも邪悪でもない、利他的で有益な実験に聞こえるけど？」
「あのな。氷が溶けてるのは極地。こんな暖かいところ冷やしても、北極の氷が溶けるのは終わらんのよ。
それに、こんなところで勝手に海を冷やしたりしてみ。
エルニーニョやラニーニャみたいに、どんな要因がテレコネクションを引き起こすか、分かったもんじゃない。インド洋が冷えると、日本が暑くなったりするのが、地球じゃからな」
なんとなく、本当になんとなくだが、春告にも此花の焦りは分かる。
「でも、本当に、勝手に移動させて良い物なわけ？」
「くどい！　日が暮れる前に日本に帰ってこ！」

半日で北半球を往復させる無茶を平気で命じるのが此花クオリティ。
とりあえず、犯罪行為ながら意義は確かにありそうだと、春告は自分を納得させることにする。
「ところで、これも、ニカニカ動画にアップするわけ？」
「そなたが無様な仕事しなけりゃの」
一体どんな無茶なシナリオをでっち上げるつもりだか。一抹の不安はあるが、監督に口答えできないのが役者の立場である。
春告は手近な二隻に力を向けると、自分と船が空を飛ぶ様をイメージした。
「ところで、これだけ派手な物を飛ばせると、さすがに目撃者が出るんじゃない？」
「別に、パパラッチされたところで、身元判明しないじゃろ？」
正義の味方で魔法使いにしては、あり得ない開き直りっぷりだ。
「わしはな、わしだけの味方で魔女じゃ。エコじゃなくてエゴじゃ。悪いか？」
良いか悪いかはともかくとして、此花の性格は身に染みて思い知らされている。春告は有無を言わず、黙々と力の発現を念じようとして、刹那、悪寒を覚えた。
理屈ではない。
名状しがたい恐怖心が、背後から春告を覆いつくさんと迫ってくる。
（敵？）
明確でない感覚に、春告の無意識は敵対するものを嗅ぎ取った。
「薺、索敵！」
瞬時にモニターに、南方から高速で迫る光点が映し出される。
（なにか、くる！）
その速度は、船舶などではない。
と言って、この海域は航空路にも指定されていないはずで、戦闘機にしては、逆に遅すぎる。

「春告！　全力で逃げい！」
『一目散推奨』
（二人とも、勝手なこと言って）
今まさに、二つの船舶が浮かび上がったばかりである。
春告の意識は自分の姿勢を維持させることで精一杯で、逃げ出すにしろ、まずは二隻の雲製造船（仮）を着水させなければならない。
光点は、その間に射程範囲に侵入する。
（だったら！）
覚悟を決める春告の鼓膜を、此花の怒号がひっぱたいた。
「逃げろって言ってんじゃろ、この唐変木！
今のそちのウィルゲム配置じゃ、その相手には勝てん！」
『接敵』
春告が船を着水させるのと、相手を肉眼で確認したのが、同時。
「まさか……あれも、ガイアギア？」
青と赤の二色に彩られた、人間大のメタリックなボディが、高速で宙を滑っている。
どこか既視感を覚えるそのシルエットは、メカメカしく四角。「トランスフ〇ーム」のかけ声と同時に、コンテナ運搬車に今にも変形しそうなディテールだ。
「お前が来ることは予想していたぞ、此花」
（州知事だっ！）
正確に言うならば、『日本版』州知事の声が、此花の名を、上空のメタリックボディから放つ。
「……お前、此花か？　ひょっとして貴様、少女の容姿に飽きて、性転換したのではあるまいな？」
「んなわけあるかっ！」
春告のヘルメット内に、此花の怒号が轟く。
「耳元で怒鳴るなよ！」
春告も負けじと声を荒げる。基本外部との接触を想定していなかった春告のガイアギアには、外部スピーカーがない。それでも『念

じ』れば、相手に声は届けられるはずだ。
だが、春告は、スーツの中に引きこもる道を選んだ。
相手が勝手な勘違いをしているのを、わざわざご丁寧に解消してあげる義理はない。
「沈黙を選ぶか。まぁ良い。
その船は私有財産でな。ま、有り余る財を処理した程度の価値しかないのだが、黙って持っていくというのであれば、国際指名手配をかけるまでだぞ、此花」
上空のガイアギアは、あくまで春告を此花と見ようとしている。
その、男子小学生が図工の時間に作った粘土細工に宿った龍神様によく似た声に、ともすれば親近感を覚えてしまう春告だったが、それでも、首筋の後ろが、いやに冷めて、緊張を主張する。
「アーノルドのくせに生意気な」
此花の鼻息が荒い。
「昔の知り合い、というか、共同研究者っていったところ？」
春告の推理に、
「おおむね正解じゃ。というか、何でわしの指示を無視した！　いいから、とっとと逃げい！」
図星を刺された此花が吠える。
いっそ此花との通信回線もシャットアウトしようかと思う春告だったが、そうすれば今度は日本に帰れなくなるだろう。
（でも、今はこっちの出力は通常の三倍になっているんだ）
それをすべて加速に投入すれば、亜光速は嘘でも音速の壁くらいは越えられる。確かに目の前のアーノルドから逃げ出すことも可能かもしれない。
けれど、春告の胸の奥にある闘争本能は、その三倍の出力を持って、目の前の相手と対峙することを、強く願っていた。
それは、通常の春告の思考とはかけ離れている。
しかし、この、胸の奥から沸き上がる衝撃は、男子としては間違いなく正解の感情だった。

女としては、ここは逃げろと言っている。
男としては、ここは戦ってみたいと思っている。
脳の違いか、経験の差か。とにかくも埋めようがない性別の壁を感じながら、春告はアーノルドの挙動から目を逸らさなかった。
このまま、睨み合ってはいられない。
先手を取られたら、対応できるか分からない。
だから、
「先手、必勝！」
瞬間、春告の直下の海水が爆ぜた。
背後の大気膨張を受けた春告のガイアギアが、弾丸さながらの速度を得てアーノルドに直行する。
「この、うつけがぁ！」
だが、読まれていた。
春告の突進に合わせて、アーノルドの右腕が春告のヘルメット左を強打！
すべての突進エネルギーをはじき返され、春告は前進以上の速度で海面に叩きつけられた。
巨大な水柱が立ち上がる中、アスファルトのように強固になった水面をぶち破った春告は、粘つく海水に翻弄されながら、さらに深海へ突き進む。
「いってぇ……」
防御フィールドを展開していたはずも、全ての衝撃を肩代わりするには至らなかった。
宇宙空間でも活動可能なガイアギアが、海中で動作不能に陥ることはなく、海水の抵抗によって徐々に速度を落としながら、しかし一瞬の痛みを凌いだ春告は、なぜか笑いがこみ上げていた。
自分が壊れたのではないかと思う。
しかし、胸中は清々しい。
自分は、あの時点で最良のバランスを選択したと思う。
三倍の出力を、二対一の比率で攻撃と防御に回し、可能な限り奇

襲した……だが、跳ね返された。
圧倒的な存在感で、アーノルドは春告に立ち塞がったのだ。
それは、本来なら恐怖すべきだろう。
万能すら期待していたガイアギアを持ってして、無様なまでに負けたのだ。
だが、笑いが止まらない。
ドキドキが加速する。
男として、対等以上の敵を得たことを、遺伝子レベルが喜んでいる。
「やばい、楽しんでる」
自分にそんな感情が眠っていたなんて。
負けたことが悔しいと思いながら、再度挑んでみたいと思わせる好敵手に、細胞が活性する。
ガイアギアは、破損していない。
また、やれる。
だったら、
「今度は、全力だ」
防御を捨てる。
すべてを攻撃に回す。
失敗したら、今度こそガイアギアが砕かれるかもしれない。
このまま、熱帯の海に沈むかもしれない。
「だが、それが良い」
理性が特攻を蛮行と呼ぶ。
感情は特攻を勇と讃える。
時に自暴自棄すら賞賛する男の部分が、眠っていた牡の本能が、春告の腹の奥から突き上がる。
「バカなこと考えとるんじゃない！」
此花が割り込んでくる。
『逃亡、最優先』
薺のテロップが、最大フォントで太文字で、春告の網膜を埋め尽

くす。
しかし、だめだ。
バカなことをやろうとしている。
それを女が反対する。
その事を、格好良いと思ってしまっている『男』を自覚する。
女なんかの言いなりになるな。
勝負なんて、やってみなけりゃ分からねぇ。
根拠のない自信に、男のロマンが止まらない。
そして、春告のワクワクを反映したかのごとく、カドゥケウスが描く五芒星が輝き始めた。
十粒のウィルゲムが担当するは、春告の『念』のインプットから、雑念を省き、純粋な願いを増幅し、対象を特定し、力に変換して、その力に方向を与えて、最終的に出力する、一連の処理。
その内、直前に変更したのは、雑念を除去するノイズゲートと、繊細に力を制御するエフェクタだ。
今、カドゥケウスは、春告の中に渦巻く様々な感情をすべて力として受け止めて、それをまっすぐに、力に還元して光り輝く。
アウトプットを担当するのは、太陽の光を閉じこめたが如き、黄色い半透明の日長石（サンストーン）。
五芒星の下部三点を占めるサンストーンが、限界まで輝き、春告の欲望を肯定する。
「駄目で、もともと！」
無謀は、無謀だからこそ楽しいと、春告は実感として今、学んだ。
此花は怒るだろう。
薺は泣いてくれるだろうか。
分からない。分からないけど、逃げたくない。
だから、全力で挑もう。
負けて、生きていたら、逃げよう。
それが、春告の最大譲歩。
夢野此花と言えども、春告のカドゥケウスに干渉することは、そ

の特性上不可能だ。
今、この瞬間を生き、現実に干渉するのは、春告しかいない。
それが、一人だと言うこと。
全てを選択し、責任を持ち、痛みを全て受け止めるということ。
春告には、どちらが正しいのかは分からない。
此花がやろうとしたのは、確かに窃盗だろう。
アーノルドがやっている実験は、私費とは言っても、全地球的に影響を及ぼす危険があるのだろう。
双方に譲れない願いがあり、今すぐに判断は下せない。
ただ、此花とは数ヶ月を過ごした。アーノルドとは初対面だ。
それ故に、春告は、アーノルドと対峙する。
人間なんて、そんなものだと、春告は短絡した。
何よりも直感で、ガイアギアはこのために作られたのだと、悟った。
そして頭の中で誰かが、「男なら闘え」とけしかけ、「応」と頷いてしまった自分を、自然だと信じた。
故に。
春告の熱意は。
海中に伝播し、赤熱したシャインダークの熱量は、急速に海水温度を上昇させた。
海中の熱膨張が、海面を煮立たせた。
不自然な霧が発生し、アーノルドを含む一帯が濃い『白』に埋め尽くされる。
「来るか、少年！」
その霧から、アーノルドは、男の熱意を感じ取った。
逃げるための目眩ましではなく、押さえられない武者震いゆえの熱量だと看破した。
これは、『女』の仕業ではない。
『男』だけが共感できる潔さだ。
アーノルドは、先の突進を、全力で退けた。

次に来るであろう無謀もまた、彼は全力で受け止める覚悟を決めた。
これは、決まっていた邂逅だ。
夢野此花がアーノルドたちと袂を分かって尚、同じ道を歩んでいたら、その道は必ず交差するように出来ていた。
アーノルドが独断専行で人工雲による地球冷却実験を強行したのは、それが此花を呼び寄せると分かっていたからだ。
仲間には止められた。
「男には、負けると分かっていても、挑まなければならない戦いがあるのだよ」
アーノルドは胸を張って、仲間の忠告を拒絶した。
故に、これは、彼の望んだ闘い。
「俺は、人間の力で、金の暴力で、思い通りに気候に介入しようとしているぞ、此花。環境汚染の魔女たる貴様なら、自分の境界を脅かす俺を、止めて見せるがいいっ！」
霧が増す。
海面が泡立つ。
全力を右拳に集中する。
アーノルドにとって、これは分の悪い賭けだった。
夢野此花のガイアギアは、最終論文を元に構成された、いわば完成形だ。
ウィルゲムを軸に発現する魔術システムは、夢野此花と狭依天都（さよりあまつ）の二人の魔女によって編まれており、アーノルドを含む五人に供されたカドゥケウスは、あくまで試作段階のものだった。
故に、アーノルドのガイアギアは、五粒のウィルゲムで構成されている。
もちろん、その性質上、ウィルゲムの数だけが勝敗を左右するとは言えない。
「ウィルゲムの数の差が、戦力の決定的な差ではないことを……証明できればいいのだがな」

ただ、右拳のみを強化させる、一点強化型ガイアギア。
それがアーノルドの望んだ姿であり、苦笑しながらもそれを形にしてくれたのは、かつての仲間であった夢野此花だった。
「そもそも、貴様の発した夢だろうに」
アーノルドには分かっている。
過去を責めても意味などない。
すべてはあるようにしか流れず、どんな不条理も、流れに従った結果でしかない。
此花が『新罪』を抜けたのは、ある意味確定された未来だったのであって、ほかの六人にはどんな落ち度もなかったのだ。
此花は、彼女の意志の導くままに、組織を抜けて野に籠もった。
そして今、独自の規範に従って、ガイアギアを運用して、地球気候に介入を始めようとしている。
「かつての自分の過ちを、無かったことにしようというのか！　東洋の魔女よ！」
叫びに返事はない。
アーノルドに出来るのは、此花の代行者であろう、白銀のガイアギアを迎え打つのみ。
「一人ですべてを成そうとする、その思い上がりを、自分の見込んだ少年の傷ついた身体で、後悔するが良いわ！」
全力同士のガイアギアの激突が、果たして相手を五体満足で生き残らせるかどうか分からない。
だが、全力同士であればこそ、決するのは運のみ。
勝利の女神のきまぐれだけが、アーノルドと白銀のガイアギアの生死を決める。
それは、一瞬。
一度の激突。
空気が、煮える。
サウナの如く熱した水蒸気が、視界を白く埋め尽くす。
その霧を、一筋の閃光が、斬り咲いて、来た。

「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
「ぬぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉっ！」
少年と大人の男が、同時に咆哮を発す。
赤熱化した白銀のガイアギアが、通常の三倍の出力全てを放出して、己を砲弾と化して迫る。
アーノルドは、それを捉えた。
瞬時に拳は応じて、インパクトの瞬間に確かに相手の頭を打った。
力は拮抗せずに爆発する。
何かが弾け、両者の激突の空中に無数の破片をまき散らした。
それが己の拳の装甲だと気づいた時には、アーノルドの視界に白銀のガイアギアはいない。
足下の海面が暴発し、立ち上がった巨大な水柱が、高速で海面に突入した物体を知らしめる。
白銀のガイアギアは、沈んだ。
自分は、まだ、浮いている。
だが、その右腕は、装甲がことごとく吹き飛び、裂傷から滲み出た血が、筋となって流れ落ちていた。痛みは鈍い。骨が折れた可能性がある。
胸元をみれば、五角形を描いているカドゥケウスの一端のウィルゲムに亀裂が生じてた。
それは、力の配分を担当していたウィルゲム。生命維持すら最低限にして出力に回した結果、激突のフィードバックに耐えきれずにショートしたのだろう。
これがもし、力の出力を司るウィルゲムであったなら、海に沈んでいたのはアーノルドだった。
「これでは、救出にもいけぬか」
吹き上がった水柱が、重力に引かれて大粒の雨と化し、海面を叩き続けている。その奥に沈んでいるであろう白銀のガイアギアを見ることは叶わない。
「次があれば、浮いているのはお主かも知れぬな」

アーノルドは海域を離脱した。
傷ついたウィルゲムで、いつまでも力の顕現が継続する保証はない。
「叶うなら、再戦を願おう、少年！」
その『願い』が、白銀のガイアギアに届くことを、アーノルドは自身のカドゥケウスに期するのだった。

遮るもののない黄昏が、世界を茜色に染めていた。
汚れのない大気は本来の解像度を取り戻し、曇り一つない大空というスクリーンに、夜色と橙の滑らかなグラデーションを投影する。
小島の浜辺に打ち上げられた春告が、目覚めて一番はじめに目にしたのが、血のように赤々と輝く太陽だった。
朱墨をバケツいっぱいぶち撒けたように、世界全てを、紅で塗り潰さんとする、容赦のない夕焼け。
それは人工粉塵に散乱されない、澄んだ南洋であるからこそ、『生』に近い生命の父の光だった。
「生き……てる？」
首を振る。
手を握る。
春告の右手は彼の意志通りに動き、その瞳は、ガイアギアに包まれた白銀の腕が、強烈な陽光を受けて紅く輝くのを見た。
気を失っていたのに、カドゥケウスはガイアギアを発現させ続けたらしい。
此花の設定した安全装置だろうか？
それとも、ノイズゲートを取り外したことで、本来なら雑念として漉し取られる生存本能を、カドゥケウスが『命令』として受諾したからか？

どちらにせよ、春告は生き残った。
笑いがこみ上げてきた。
同時に痛みが全身に走った。
悔しさはない。
充足だけが、全身に満ちている。
なぜ？
論理的ではあり得ない感情だった。
（決まっているだろ？　初めて、我を貫き通したからさ）
脳裏の知らない誰かが、きわめてシンプルに答えをくれた。
夕日を反射した世界は、ただ赤々と、あるがままに煌めいている。
誰もいない砂浜で、春告はただ朗々と、胸の奥の衝動のままに笑い続けた。
全力でぶつかって、全力で負けた。
しかし、激突の瞬間に砕け散った破片は、自分のガイアギアでは無かったらしい。
海面に叩きつけられた衝撃も、海流に揉まれた荷重も、春告のガイアギアは主もないままに粛々と受け止めてくれた。
「次は勝てるかなぁ」
笑いの衝動が消えた春告は、自然と、再戦を期待する。
それが、決して此花には受け入れられないだろうと思うのに。
「あ、連絡しなきゃ」
全身に疲労がある。
様々な痛みが、神経網を駆け巡る。
だが、その全てを心地よいと、感じる自分がいた。
これが、貫き通した結果だ。
受け止めるべき責任だ。
己のエゴだ。
だから、全てを受け入れた。
たとえ此花の怒声で、今度こそ鼓膜がぶち破られようとも。
春告は満足とともに、立ち上がった。

胸元のカドゥケウスは、闇色を深くしつつある空に反して、太陽の力を吸収したかのごとく、力強い輝きを放っていた。

「ただ……いま？」

痛む身体を休み休み飛ばして、春告がアパートに帰りついたのは、既に深夜だった。

此花の部屋以外、全ての明かりが消えている。

出迎えを期待していたわけじゃない。

それでも、此花の罵倒くらいは聞けるだろうと思っていた。

しかし、現実にアパートは、静まり返っている。

確かに春告は、命令を無視して、負けた。

それは責められるべきだし、春告もどんな罵倒も受け止める覚悟だった。

なのに、アパートの照明が消えている。

春告の帰還を無視するかの如く。

「え……と」

対処できなかった。

拒絶されたと思った。

一瞬立ちすくむも、しかし踵を返したところで、今の春告が帰れる場所はない。

ここにしか、今の春告の居場所はないのだ。

「とりあえず、ご飯どうしたんだろ？」

赤道直下まで飛び、死んだも同然の戦闘をやらかして、春告が一番最初に心配したのが、夕食の準備だった。

彼にとっては、全員の食生活を支えているという自負が、このアパートで存在を主張できる唯一の拠り所と言えた。

真っ先に台所に立ち、シンクに洗い物が無いことを確かめ、冷蔵庫の中身とゴミ箱をチェックして、どうやら今夜は、菓子パンとカ

ップラーメンとアイスクリームで飢えを凌いだらしいことだけ確かめた。
が、では、これからどうするというのだ。
このアパート内で、ほとんど唯一と言ってもいい不文律が、『プライベートへの絶対不可侵』である。
たとえ夢野此花であっても、自室に籠もったら外から呼びかけることはタブーとされているのだ。
薺の場合も、食事と生活必需品を置いていく時以外は声をかけることは許されず、ましてや返事を期待するなど言語道断という扱いである。
つまり、今、自室で何か作業をしている此花に話しかけることは、自らこのアパートでの生存権を破棄するに等しい愚挙であり、しかし何よりこの仕打ちは、一人南洋で男を示した春告に対して、冷酷なまでの罰だった。
（どうしよう）
といっても、今の春告に出来ることはない。
かといって、このまま此花に謝ることもせずに、堂々と自室に帰って寝てしまうのも、気が引ける。
負い目は感じているのだ。
だからこそ、此花に罵倒されたいのだ。
二度の激突のショックか、アパートとの通信回線が故障してしまって以来、半日も此花の声を聞いていない。
だからこそ、生存を主張したかった。
ゆえに、無謀を叱ってほしかった。
彼女は怒っているに違いない。
半日という長い時間が、彼女の中で怒りを励起、縮退させ、明日の朝日が昇った時に、春告という存在をイレーズするかもしれないと思うと……
（その時は、前の世界に帰るしかないのか）
戦闘の高揚も、生きて戻れた喜びも、全てが一瞬で剥がれ落ちた。

あれほど全身を満たしていた充足は、オセロを返すが如く漆黒の感情に変身し、此花と薺の指示に従わなかった春告を責め立てる。
春告は疲れきった肢体を居間のソファに沈ませた。
とりあえず、起きていよう。
ひょっとしたら此花が、飲み物を取りに降りてくるかも知れない。
一言でいいから、謝っておいた方がいいのだ。
雄としての本能が、雌に対してどうしなければいけないのか、切々と訴えていた。
クーラーの消えた居間で、真夏の長い長い夜が、始まろうとしていた。

第3話　疑惑っ？！　揺れる正義に想う過去

「わしに謝るために徹夜で起きてたぁ？！
そなたバカか？　そこまでバカか？　またはアホか？　このドたわけ！
何のためにガイアギアに外部カメラつけてると思ってんじゃい！
ずっとハルを撮影していたんだから、通信が一時的に故障しようと、ガイアギアが動いていれば生きてるなんて分かるだろが。
こっちはな、薺（なずな）と二人、そちが浜辺に流れ着いて目を覚ますまで、ずぅぅぅぅぅぅぅぅぅっとモニターとニラメッコしてたわ。
もういい加減、目も疲れたわ。
帰ってこれることだけ確認したわ。
何でその上、いつ帰ってくるかも分からない馬鹿を待ち続けなきゃならんか！
もう、信じられんわ！
昨日で最後の戦いってわけでもないんじゃから、じっくり寝て体力を回復させるのがハルの仕事じゃろうが！
今日、もいっかい赤道に飛べって言われる可能性は、これっぽっちも考えなかったんかい？
あぁ、もう！　昼間は別人みたくわがままになったかと思ったら、夜にはヘタレに逆戻りか。
とりあえず、寝ろ！　動くな！　口開くな。息止めてろ！」
「それじゃ、窒息しちゃうって」
望んだ以上の罵倒を得られた。
口を挟む隙もないマシンガン叱責に、帰ってきたばかりのふきのが苦笑いで最低限のツッコミを入れる。
ぐうの音も封じられた春告（はるつぐ）はアウアウと顎を震わせる他なく、昨日の反省もどこかに吹き飛んで、ただ一直線に自己嫌悪のダウンスパイラルに蹴り落とされる。

「どうせ動けないんじゃから、これでも見て反省してろ！」
此花(こはな)が居間の公共パソコンをプロジェクターに繋いだ。
白い壁に投影された画面に、此花が徹夜で編集したという、『宇宙(うつ)の守人(もりびと)』の第二話（ニカニカ動画投稿前）が流れる。
『衝撃！　南海に散るヒーロー？　赤熱化は三倍の奇跡を生む？！』
やたら長ったらしいサブタイトルが嫌味だった。
春告が動けないので、シリアルの簡素な朝食をとりながら、此花、ふきの、草香(そうか)、春告の四人は、プロジェクターを取り巻くような格好で、壁に映った動画に注目する。
此花のストーリーでは、シャインダークは敵の野望を阻止するために、赤道直下にやってきたことになっている。
いきなり、違和感があった。
「これ、誰の声？」
第一話では此花が担当していたナレーションが、聞いたこともないアニメ声に変わっている。
「薺」
「うぇ？」
予想外に可愛い声だった。日常離れした高音が、南海の眩しい太陽の効果を引き出して、想像以上の明るさを演出する。心の琴線をくすぐるような声を聞いているだけで、意味もなく頬が紅潮するのを感じた。
（やばい。声だけで、惚れる）
なまじ顔を知らないだけに、超絶な破壊力だった。この声には、男の中の意地すらとろけさせる力がある。今すぐにでも二階に駆け上がって涼代(すずしろ)とプレートがかけられた扉を開け放ち、生の薺の声を耳に挿入したい衝動に駆られたが、しかしそれは、傷ついた上に徹夜で消耗している現状では叶わない荒行だ。
「へぇ、こいつが、敵のガイアギア」
アーノルドを初めて見るふきのが、興味津々で身を乗り出す。
「オレのより、ださいな」

「ま、ふきのの、さらに前の試作機だしの」
「へ？　これも、此花が作ったのか？」
此花は、質問をスルー。
動画では、アーノルドの声がオミットされていて、シャインダークとは字幕で会話を交わしている。
「ねぇ、此花……気になったんだけど」
その会話内容に、春告は突っ込まざるを得なかった。
「これ、シャインダークの方が、悪役じゃない？」
「まぁ、そういう見方もあるな」
「というか、そうとしか見えないんだけど」
実は、それは昨日も疑問に感じたことだった。
アーノルドがやろうとしていた事は、人工雲を作ることで太陽光を反射させ、熱の流入を抑えることによる、地球温暖化の緩和である。
確かに、そうした気候介入がどんな地球的異常を引き起こすかは計り知れないが、基本的にはエコな理想だ。
動画でもその設定は健在で、編集の妙というか、シャインダークが雲製造船（仮）を海に叩きつけて破壊しようとしているところを、アーノルドが発見した、という流れになっている。
実際の睨み合いはそんなに長い時間ではなかったはずだが、動画では会話をさせるためか、静止画のカットインを入れて尺を稼いでいた。
「これじゃ、どう見たって、地球温暖化の解消を阻止するヒーローになっちゃわない？」
第一話で二酸化炭素を吸収しておいて、第二話では他人のエコ活動を妨害する、矛盾する行為。
「ま、その通りなんだから、仕方あるまいて」
「へ？」
爆弾発言に、此花以外の三人が固まった。
「その通りって、阻止しないの？　温暖化」

「誰がそんなことを言ったの？」
「てっきり、ハルって、そういう目的で拉致られたのかと思ってたよ」
ふきのも驚き、
「詐欺」
草香がグサリと容赦なく言った。
「いや、じゃ、もう面倒だから聞いちゃうけど……あのガイアギアと此花の関係って何？　昨日は昔の共同研究者とか言ってたけど、あのガイアギアも、船も、此花が作ったってことはさ……」
言い終わるまでもなかった。
「うん。わしが裏切って、組織を抜けた」
開いた口が塞がらない。
「え？　じゃぁ、何？　もしかして、向こうが正義の味方だったりする？」
ふきのまで取り乱し、
「悪の女幹部？」
草香が自分とふきのを指さして、首を傾げた。
「何をもって正義とするかは、難しい質問じゃがのぅ」
此花は、韜晦（とうかい）した。
これ以上は、今は語るつもりがないと、背中で主張して。
その間にも映像の中では、交渉の決裂した二人が激突し、
「あれ？　向こうのスーツ、砕けてた？」
春告は初めて、傷つき、逃げていくアーノルドの姿を見た。
「てっきり、完敗だと思ってた」
確かに、海に殴り落とされたのはシャインダークの方だ。しかし、アーノルドもウィルゲムを破損し、おまけに右腕に深手を負っていた。
五分、とまでは言わない。しかしこの結果なら、七三くらいの勝敗と言えないかと、春告は砕かれた自信をほんの少し、回復した。
第二話は、シャインダークが海底に沈んだまま、『待て、次回！』

と、やたら勢いの良い太字の筆文字を、夕焼けをバックに締めくくられた。
ヒーロー物で、いきなり二話で主人公が生死不明扱いである。
「ヒキとしては、上手いけど……」
「あれだな、ハルに足りないのは、格闘技のセンスだな」
ドラマとしての感想を述べた春告に、ふきのは戦闘内容の駄目出しで応じた。
「というかさ、海に潜って霧まで発生させて、なんで真正面から突っ込んだの、この青少年」
「単細胞に謀略なんて無理」
草香の言葉が胸に突き刺さる。
「背後とか、真下とか、相手の左側とか、色々攻め口はあっただろうにさ」
「でも、それこそ、悪の手先のやり口なんじゃ……」
「あのな、ハル。今たまたま生きてるのは、ガイアギアの性能のお・か・げ。根本的に、君は負けたの。完敗。惨敗。ライフゼロ。地上装備でうかつに宇宙に飛び出して、マシンガンでボロボロにされたどっかの人参嫌いの宇宙世紀軍人と一緒。猛省なさい」
ふきののデコピンが決まった。
泣きそうなほど痛かった。
「勝てば官軍。負ければ賊軍。これ、国際社会の常識」
草香の言葉は、いちいち切れ味鋭く、心の柔らかい部分を切り刻んでくれる。
「というか、白人の流儀」
「じゃ、日本人としては、合格ですか？」
せめて、慰めの一言くらい欲しいと、春告は声をあげる。
「死して屍拾う者なし」
情け容赦なくバッサリと、一刀両断されて春告は沈黙した。
「さて、寝よ寝よ」
春告をいじりたおして、朝帰りのふきのが背伸びをした時には、

黙々とプロジェクターを片づけていた此花が、居間を後にしようとしていた。
ふきのも、草香も、その背中に声をかけない。
「ま、ハルも今日くらい、ゆっくりしてなって。その分、夕食は頑張ってくれよな」
「必要、熟考」
女性陣は、全員、二階へと消えた。
ソファで寝返りを打つ春告の耳に、今更ながら、蝉の声が聞こえてくる。
「正義の味方、かぁ」
此花の爆弾発言をどう受け止めるべきか。
草香の残した言葉は、確かに、うかつに結論を出すべきでないと、春告の胸に染み込んでいく。
あの公園での出会い以来、春告は日々、此花の命令に踊らされていた。
それはガイアギアの発現しかり、庭の畑の手入れしかり、大気から回収して貯蔵している二酸化炭素の処理しかり、日々の台所事情の課題解決しかり、薺のメモの買い出ししかり、だ。
此花はそのそれぞれに、いちいち理由を説明したりはしなかった。手順と注意事項だけを指示して、その結果だけを評価した。
スペースデブリの処理作業や、大気中の二酸化炭素の吸収作業を通じて、『単純な空の掃除』を『地球環境の正常化』だと判断したのは、極論すれば春告の独断である。
（でも、二酸化炭素は利益出ているからともかくとして）
スペースデブリ対策は、完全にボランティアだ。
そもそも宇宙に国境がなく、各デブリの処分に廃棄者責任が明確にされていない現状、いわゆるリサイクル料金的な予算計上でもなければ、デブリの処理に公金からの報償は出ないだろう。
無論此花が裏で、ＮＡＳＡやＪＡＸＡやＥＳＡのお偉いさんと個人的なパイプを持っていたりすれば別だが、そうであれば、人工衛

星の整備や、国際宇宙ステーションの外壁掃除のような仕事が発注されても良さそうなものである。此花も大手を振って、大金をむしりとるだろう。
（でも、台所事情は、ほんと庶民感覚なんだよね）
食材の買い出しは春告に一任されているとはいえ、その購買範囲は近所のスーパーに限られ、それも特売推奨の要主婦スキル。予算は少ないのに女性陣の要望だけは多様で、質と量のせめぎ合いや、誰のリクエストを最優先するか、毎日のデザートのバラエティを豊富にするためには等々、頭を痛めて食卓を彩ってきたこの数ヶ月。純粋に食卓に乗せるための野菜作りも、ほとんど独学で実践して家計の足しに。
（基本、貧乏とは言わないけど、質素だしな、生活）
悪の組織だったら裕福というのも偏見だが。
（でも、ふきのさんの活動は、問答無用で正義じゃないのか？　最近じゃひったくり犯も撃退してるし……まぁ、手段が苛烈で犯人半殺しだから、傷害容疑で指名手配されてるって噂だけど）
疑問が渦を巻く。
考えてみれば今まで、疑問にすら思っていなかったことに驚愕する。
（あれ？　じゃ、なんで昨日、アーノルドさんに反攻したんだ？）
自身こそに大儀があると思えばこそ、此花の命令に従って船を強奪しようとしたわけであり。
（そもそも、大前提が、間違ってた？）
思考は沸騰し、度重なる価値観の揺り戻しが気分すらも悪くして、
「あ～！　駄目だ！　わっかんねぇ！」
容量オーバー、思考フリーズ。判断材料が多岐に渡って春告のメモリを圧迫。並列処理に意識が追いつかず、知恵熱が臨界点に達したところで、
「あかん。眠い」
激戦の末の徹夜に、肉体が強制終了を告げたのだった。

第４話　強襲！！　世界で一番宝石を愛する男！

「おーい、ハル。生きてるか、てめぇ」
目が覚めると、宙づりだった。
持ち上げられた右腕が、というか右肩が猛烈に痛みを主張し、地に足の着かない状態を脳が理解するより早く、眼前に目つきの悪い青年の、気の抜けたコーラのような表情がドアップで迫っていて、
「あ、わっ、いてぇぇぇぇぇぇぇぇぇ」
二メートルの長身を誇る青年に警告抜きで手を離されれば、まともに受け身もとれずに春告（はるつぐ）は居間の床に激突した。
「おぉ、元気そうでなによりだ」
意地悪とか皮肉とかではなく、本心から笑顔で春告の無事を喜ぶその青年に、
「近衛（このえ）さん、なんで、今日？」
覚醒したての春告の脳は、疑問だけを吐き出した。
「おう。ただいま、ハル。お前が喧嘩売って負けたって聞いて、山から降りてきたぜ」
ニカッと白い歯を輝かせ、しかし二週間近く山の中だけで生活をしていた近衛との接近遭遇は、さわやかさとは程遠い、生々しい獣臭を春告に運ぶ。
「とりあえず、シャワー浴びて下さいよっ！」
あと、髭っ！
「んだよ。心配して帰ってきてやったんだからよ、行き別れた兄弟との再会ぐらいの暑い抱擁で迎えてくれても良さげじゃね？」
だが、一歩を近づいてきた近衛のジーパンからこぼれ落ちるのは、どこで付けてきたのかも分からない草花や土の粉や虫の死骸で、
「あぁ！　もう、外！　外でモップ！」
本気で暴れる五秒前の春告に、日焼けの黒い肌をクシャッと畳んだ近衛の表情は無性に豊かで、

「ふははっ！　ハルめ、どうせまた落ち込んでたろ！　やばい、離れろ！　きゃつのネガティブダウンダイブが鬱るっ！」
「鬱るかっ！」
自分より一回り近い年上の青年のバイオリズムに乗っかってしまえば、いつまでも此花のことで悩んでなどいられないのが、十代の少年の特権である。

農業用に地下水を汲み上げている井戸端で、薙原（なぎはら）近衛が大胆に全裸で水浴びをしている間に、司馬春告にはどうしてもやらなければならない、使命があった。
焼き飯作りだ。
ご飯は通常の五倍。卵を五個同時使い。冷蔵庫に残っているありったけの野菜と、安っぽければ安っぽいほど良いというこだわりに即した豚コマ肉をこれでもかと投入して、味付けはシンプルイズベスト、ソルトオンリー。試しに旨味成分を隠し味に加えただけで怒られた春告は以後、ブラックペッパーすら近衛に振りかけさせて、一食作るだけで右握力がバカになりそうな焼き飯は、近衛の帰還には無くてはならない物だと厳命されていた。
薙原近衛は、それを、飲む。飲むように食す。咀嚼する時間すら惜しいと全力で焼き飯に挑む姿は後光すら感じさせ、見ているだけで面白い食事というのもあるのだという事を、春告は労働の対価として堪能させられる。
それは今日も変わらず、
「ごっつぉさんでした！」
バンッと空気を破裂させて、両手を眼前で打ち鳴らす近衛の前の皿は、米粒一つ残さず綺麗サッパリ完全完食。
「三分五秒でした」
「いただきます」がスタートピストルなら、ゴールテープは「ご

ちそうさま」。
「くぁぁぁっ！　三分の壁は厚いなっ！」
いや、充分早いから。むしろ健康に悪いから。というか丹誠込めてお米を作ってる農家に謝れ、味わず飲み込んでごめんなさいって謝れ。
春告の半眼は決して近衛を誉めてはいなかったが、近衛は相手の無言を肯定と断定して疑わない希有な才能を持っている。
此花（こはな）とは別ベクトルで、聞く耳持たずの言っても無駄人種。
「で、だ。青少年よ」
二時間足らずの睡眠を無理矢理起こされた春告は、焼き飯作りという重労働にホトホト疲れはててていたが、そんな事を気にしないのが近衛イズム。
「腹も膨れたところで、お兄さんに十代の熱く迸るブレーキレスでブッルゥゥゥゥゥな主張をブチ撒けてみてもいいかもよ？」
「いや、というか。昨日徹夜したんですっごく眠いんですけど、今」
「うん。で。なにがあったの」
聞いちゃいねぇ。
こうなったら諦めるしか道はなく、このアパートに来てから、パラメータ『忍耐』だけが強化されていっている気がする春告だったが、近衛という男がもともと、鉱石好きが高じて年がら年中鉱山に籠もりっきりの変人である以上、まっとうな精神回路では太刀打ちできるものではない。
国内外を問わず世界中で鉱山を掘りまくるのが生業の近衛は、一度山に潜ると、気に入ったウィルゲムが手にはいるまで何ヶ月でも下山しないと言う、アウトドアスキルの有段者である。
その近衛をして、二週間足らずでアパートに戻ってきたのは異例中の異例と言っても過言ではなく、春告の思っている以上に、此花にとってアーノルドとの一戦は、痛手だったのではなかろうかと、心の端が少しだけ痛む春告だったが、
「最初から説明しなくちゃいけないんですよね」

当然のことながら、一度山に潜った近衛に、ネットサーフィンはおろか、社会経済のニュース知識を期待してはいけない。こういった用事でもなければ、夏場は高山（こうざん）に避暑を兼ねて引き籠もるのが薙原近衛という男である。

「いや、お前のウィルゲム渡してくれ。直接聞くから」

あぁ、と春告は近衛の特異を思い出した。

ウィル《Ｗｉｌｌ》ゲム《Ｇｅｍ》とは、その名を意味するとおりに、意志を持っている宝石だ。ただし、宝石と意志を疎通するには常人には無理な話で、薙原近衛は石好きが高じて会話が可能になったのか、会話が成立するから鉱石バカになったのか、とにかく常人にはないスキルを所有していたが故の、変人生活を送っている青年だ。

春告が自分のウィルゲムが入っているポチ袋をそのまま近衛に差し出せば、受け取った近衛はポチ袋の中身を全部テーブルの上にぶち撒けて、

「あぁあぁ、どいつもこいつも疲労の極みだな、こりゃ。ちゃんと太陽光と流水でけがれを祓えって言っといただろ？」

春告をキッと睨んだかと思えば、一瞬後には相好を崩して摘み上げた日長石に頬ずりを始めていた。

「おうおう、可哀想になぁ。お前たちの意志を尊重した結果とはいえ、満足に手入れもしてくれない主人に会わせてしまってごめんよ」

一体、石と人との間にどんな会話が成立しているのかは不明だが、近衛の言動は自分の子供に対する父親の溺愛そのものであり、

（たとえ物でも、こんだけ愛してもらったら、喜ぶだろうなぁ）

カドゥケウスを通してガイアギアに変身するようになって数ヶ月。自分に力を与えてくれる魔術に感謝を忘れた覚えはないが、目の前の近衛のように、態度として愛情を示したことはなかったと、春告は自戒する。

（でも……事情を知らない人が見たら、フィギュアを愛でる変態と変わらなく見えるだろうな）

何しろ近衛は、口の中に入れて味わうのが究極の石愛と信じて実行する男だ。油断してると春告のウィルゲムが唾液まみれになる可能性もあり、そういう意味では監視の目をゆるめることは出来ない。

瑪瑙《アゲート》、琥珀《アンバー》、柘榴石《ガーネット》、紅玉髄《カルセドニー》、珊瑚《コーラル》、日長石《サンストーン》、月長石《ムーンストーン》、翡翠《ジェダイト》、真珠《パール》、瑠璃《ラピスラズリ》。

春告のカドゥケウスを構成するウィルゲムは、此花の趣味もあって十粒全て、和名の響きで選ばれている。昨日のように条件によっては宝石の置換もするため、各二三個が袋の中には入っていた。

（近衛さんだったら、全部個体識別出来るんだろうな）

春告も変身に必要なため、種類による見分けだけは付くようになったが、それでも触った感触だけで分かるとか、モース硬度の違いで見分けるだとか、各石の輝きが全然違うなどという変態的識別方法は会得していない。もちろん、近衛推奨の、味識別など言語道断である。

（でも、各石の特徴を覚えて、せめてローテーション組むくらいの工夫は必要だろうなぁ。本当は石個々の相性もあって、違う真珠を使うと微妙に力が曲がったりするし……）

もちろん、近衛が認めたウィルゲムである以上、不良や故障はあり得ないが、それでも各石によって、含まれる成分の違いや、出土状況の違いで性格に差があるのだという。

「ま、人間と同じだと思って接してやれば、間違いねえ」

そのための石の喜ぶ手入れなども近衛からレクチャーを受けていたが、毎日のように出勤が重なれば、なかなかメンテナンスにまで気が回らないものだ。

「ふぅむ。なるほどな。だいたいの事情は分かった」

時間にして十五分ほどだろうか。近衛は全ての石との会話を終了させると、全て得心したとばかりの会心の笑顔で春告と向き合った。

「こいつらの主張を伝えよう。週休二日制の導入と、定期メンテナ

ンスの充実、およびメンテナンス設備の拡充を要求するものである」
「時期外れの春闘ですかっ！　というか、近衛さんははどっちの味方ですか！」
「俺は交渉人だ。金次第で動く」
（違う、それ交渉人違う。ネゴシエーターに謝れ）
一瞬で近衛に場の空気を握られた、というか、帰ってきてからこっちずっと、振り回されっぱなしだ、と春告はようやく気づく。
「だいたい、近衛さん、問答無用で石の味方でしょ！」
「心外な。俺はただの通訳だ。石たちの主張を代弁しているに過ぎない」
「だったら、僕の言葉も通訳してください。ここ最近の激務、特に昨日の活動に関しては、心の底からの感謝と、そして謝罪を。今日は緊急以外の出動はないだろうから、せめて近衛さんに、たっぷりと検査と修復と洗浄を受けて欲しい、と」
「石たちは少年の手入れが希望だと言っている」
即答だった。
「つか、一回通訳して下さいよ！」
「彼らは人語を解するぞ、当たり前だろ」
「一方通行すぎる」
「だったら、石の言葉を体得するべきだな。まずは舌で直接、磁気振動を読みとる訓練を」
「積極拒絶します」
春告は全意志を瞳に込めた。
クーラーの効き始めた涼しい居間に、全く必然性も必要性もない視線光線の交差火花がバチバチ散る。
「なら仕方がない。せめてこのウィルゲムは、涼代嬢（すずしろ）に預けるか」
「なんで、ここで薺（なずな）の名前が？」
「なぜって、彼女も一応魔女の素質があるからな。変身こそしないが、カドゥケウスは渡しているぞ」
春告にとって、初耳情報だった。

「というか、会ったことあるんですか、薺に？」
「そりゃ、会わなきゃウィルゲムが選べないだろう」
春告の驚きぶりに、近衛の方が付いていけない。
「というか、実在したんだ、薺」
「なんだなんだ、その、火竜の逆鱗を初めて手にしたときのような反応は」
「いや、むしろ、未だに見たことのない一角竜の心臓と同格の存在なんだけど」
「？　でも、ハルが来てからも、何回か俺は会ってるぞ、ここで」
「……は？」
「いや、ハルが居ない時に、涼代、部屋から出て、ここでウィルゲムの手入れ一緒にしたんだって」
春告は、両手で頭を抱え込んだ。
絶望が胸を締め付ける。
「……僕、なんか嫌われるようなこと、したのか？」
「どうやら、言ってはいけないことを言ってしまったらしいな。少年、忘れろ。全ては俺の口から出任せだ。恨むなら俺の唇を恨め。いや、むしろ、俺の唇を奪え！　さぁ、ハリー、ハリー、ハリー、ハリィィィィ！」
「なんで僕以外女性ばっかっていう境遇で日常送ってながら、あえて年上の同性の唇を求めなきゃならんですか！」
「……いや、だってハル、夜這いの一つもしないんだろ？」
「この家で、もし万が一そんなことをしたとして……その次の瞬間に僕の首は胴体と繋がっていますかね？」
「いや、首は繋がっていると思うぞ……達磨になってる可能性は否定できないが」
男二人、女性陣（主に此花）の容赦のなさに関しては、絶大な信頼を置いているが故に、クーラー以上の冷気を、その背筋に感じた。
「じ、冗談でも縁起が悪い話だったな。えっと、なんでこんな話題に……」

「いや、これいじょう僕の傷を抉らないで下さい。
それより、どうだったんです？　ウィルゲム達の記憶、覗いたんでしょ？　あのガイアギア、近衛さんは見たことありますか？」
此花という恐怖の具現が、二人の共通話題を復活させた。
むしろ、この話題こそが本筋だ。
「いや……あんなオプテ〇マスみたいな奴、見たことないな。だいたいあれ、ガイアギアなのか？」
「此花の知り合いで、カドゥケウスを使っているっていうのなら、十中八九間違いないでしょ？　第一、此花が昔の知り合いだって認めているんですから」
「だとして、なぁ」
近衛は、琥珀の一つをつまみ上げると、それを額の前にかざしてクルクルと回しながら覗き込んだ。外からの光が透き通って、近衛の額に黄色い半透明の影が落ちる。
「駄目だな。こいつらは、俺が掘って此花に渡した石だ。つまり、あのガイアギアのおっさんは、俺と出会うより前の此花の知り合いって事になる」
「じゃ、聞き方を変えますけど……」
そう前置きして、春告は両肘をテーブルの上につけると、両手を組み、その組まれた中指に顎を乗せる形で、肝心の問いを発した。
「近衛さんは、此花がガイアギアを作った理由、知っていますか？」
長い、長い沈黙が、二人の間に生まれた。
時を止めたかのような春告の発言に、しかし屋外の蝉の声だけが、まるで秒針のように止まらない時の流れを主張する。
クーラーの効果があまねく行き渡ってきた居間にあって、二人はその首筋に、玉の汗を浮かばせる。
「近衛、さん」
喉の奥から絞り出したかのように、春告の声は、およそ日本語の響きをなさなかった。
「あぁ、皆まで、言うんじゃない」

対する近衛も、春告に負けず及ばず、病床から最後の言葉を投げかけるよりも儚い音を、肺から吐き出す。
（僕ら、手足もがれるんですかね）
（いや、あの魔女のことだ……真ん中の足だけって線も、有りうるな）
二人の呼吸器は今、生存ギリギリのラインまで、その機能を休止させられていた。
疑う隙は、微塵もない。
犯人は、此花だ。
あの別れの後、よりによって魔女のテリトリー内でその過去を暴き出そうなど、間抜けにも程がある愚挙であったことを、春告は身動きの取れぬまま……朝食を運ばれなかった薺がしびれを切らして此花の部屋の扉を叩き、
「あ、薺！　え？　きゃぁ！　ご、ごめん、ごめんなさい。わっしが悪かった、許せ、許せ、怒るな、というか振り上げ……ぎゃぁぁ！」
此花の悲鳴という、興味深いにも程があるドタバタを、よりによって薺が引き起こしたことに苦笑を覚えながら、
（薺って、腹が減ったら凶暴になるんだ、気をつけよう）
と、微動だに出来ぬ中で見当外れなことに焦点を当てながら、夏の日の午前を過ごしたのだった。

第5話　激白っ？！　極北を埋め尽くす胸焦がす想い

「へぇ、白夜って本当に明るいんだ」
「何をのんきな事を」
ふきのの心底感心したという明るい言葉に、春告（はるつぐ）は呆れざるを得ない。
時は深夜。
場所は北極。
見えない足場にでも引っかかったように、南の空に太陽が居残って、空は白々と、不思議な光に照らされている。
見渡す限りの一面の白銀……ではなく、所々に黒い面を覗かせているのは海面だ。夏場に溶けて薄くなった氷は所々でひび割れ、流氷と化し、そのまま海水に埋没していく。
「そんなことはいいから、早く念じてくださいよ！」
「もう、ハルって情緒ないなぁ」
「ふきのさんに言われたくないです」
「この格好のオレは、夜王（ナイトライダー）だ！」
春告は一瞬、そのナイトはNではなくKで始まるのが真実だと告げたくなったが、グッと堪えて念に集中した。
場所は北極。
季節は夏。
二人は今、薄氷を踏む思いで、文字通り薄氷の上に立っている。
「これって、あれだね。アスガルド編だよね。つまり、オレってアテナ様か！」
「いや、絶対にヒルダでしょ……あれ、でも性格はヒルダの方がいいのか？」
適当に突っ込みを入れながらも、春告の集中は揺るがず、足下に集中した。
北極に氷を張ること。

それが今日、此花（こはな）から命じられたミッションだったのだ。
聖闘〇星矢が北極の氷の融解を防ぐために戦ったのは、そのことで海水面が上昇し、沿岸部の都市が水没するのを阻止するのが目的だったが……現在、夏場、既に北極の氷は溶けかかっていた。
もちろん、当時は今ほどコンピューターも進化していなければ、検証すべきデータも揃っていなかっただろう。
そして今になって言えるのは、北極の氷が全て溶けてしまっても、あの当時予想されたような大洪水という災害は起きないだろう、というシミュレーション結果だ。むしろ北氷洋の氷が溶けることで、ロシアやアラスカ、北欧三国と呼ばれる国々にとっては新手の漁場と航路が開け、ある程度の経済効果まで試算されている。
が、此花は言った。
北極の氷を、厚くしてこい、と。
理由は二つ。
一つは北極の氷が溶けることによる海面上昇、の抑制。たとえセンチ単位であろうと、砂浜が消えるような悪影響は免れないからだ。
二つ目は、氷による太陽光の反射。前回の赤道出動と矛盾するようだが、太陽光を白い物体によって宇宙に反射することは、気温上昇を防ぐという意味では、理に叶っている。
もともと北極も南極も、氷が溶けないことで一定の太陽光を反射し、だからこそ、地球の気温は一定の値に保たれていた。逆に言えば、今の地球環境は、北極の氷があることを前提に構築されていて……もし氷が消えてしまえば、北極が反射していた太陽光は、全て北極海に吸収されて、熱となって大気に還る。
ゆえに春告とふきの、
「だから、オレは夜王だ！」
もとい、シャインダークと夜王は、小宇宙もとい念を込め、ウィルゲムの助力による北氷洋の氷床増築に出動させられた。
「というか、なんで夜王まで来たんです？　街の平和はいいんですか？」

「んん、一晩放っておいたからって、劇的に悪くなるわけじゃないし。白夜って一回見てみたかったし」
それでいいのか、正義の味方。
「シャインダークも、特訓しなきゃ、と思ったしね」
「特訓？」
「そそ。格闘の」
春告は今朝の上映会を思い出した。アーノルドとのどつきあいに駄目だしをしたふきのは、春告にもっと格闘のセンスを身につけるよう、苦言したのだ。
「え？　ここで？」
「だって白夜だよ。照明いらなくて、エコじゃん」
そういう問題だろうか、と春告はスーツのなかで半眼になるが、相対するふきのはやる気に満ちていて、引き下がるつもりは全くない。
（それにしても）
と、改めて春告は思う。
（エロいな）
夜王のデザインの話だ。というより、それはデザインですらないのかも知れない。
ふきののガイアギアは、宇宙世紀のパイロットスーツか、新世紀のプラグスーツか、民間ロケット会社のスキンタイトスーツかと見間違うほどに、肉体のラインにピッタリだったのだ。
カラーは、真紅。燃える女がコンセプト。
その、出るとこは出て、引っ込むところは窪んでいるメリハリボディは、毎日下着姿に見慣れているからこそ……全裸以上に肉体ラインを強調していて恥ずかしい。
頭部と肩、肘、腰、膝など、要となる部分には硬質なプロテクターが保護のために貼り付いているが、結局キモは、殴ることに特化した拳と、蹴ることに重点をおいた脚だろう。
格闘一筋。

ひょっとしたら、相手の劣情を刺激して敵意を削ぐという目的もあるのかもしれないが、基本ふきののガイアギアは、動きやすいことだけを念頭に置かれている。
だったらもう少し、背景にとけ込む努力もするべきだろうと春告は思ったが、目立つことによって犯罪を抑止する、という大義名分を掲げている以上、せめてカラーだけでも変えるという選択肢は存在しない。
（それとも、ミノ○スキー粒子下の運用を考慮してる？）
特殊な粒子を散布された空域では、赤色が見えにくくなると言う後付け設定ではなく、あえて目立つことで敵の戦意を挫き、味方を鼓舞した彗星の男のごとく。
唐守（からすま）ふきの＝夜王は、その存在を示すことにおいて夜の街の秩序となり、暴力をチラツかせることで、無秩序を押さえ込もうとしているのだ。
「んじゃ、氷も厚くなったことだし、始めようかね、ハル」
「本当に闘うんですか？」
「せっかくだしね。オレら生活すれ違いだから、ゆっくり会話する機会もあまりなかったし」
「……闘いながら、おしゃべりもすると？」
「え？　拳と拳で語り会うんじゃないの？」
肉体言語というコミュニケーションもあるのだと、春告の眼前に立つ女は言っている。
「その上、氷は造り続けるんですよね？」
「当然。でも、黙って造ってるだけなんて、暇じゃん」
おしゃべりしながら氷を造るという、ありふれた選択肢は彼女には存在しないのだろうかと、春告は真剣に期待した、が。
「んじゃ、先手、もらうよ」
空気は固まらずに、いきなり突風スピードで動き出す。
「消えた？　上？」
格闘ものならお約束の展開に、反射的に上空を仰ぎ見た春告は、

しかし、
「いない！」
「背後でしたぁ！」
心の底から楽しそうなふきのの台詞が、背骨に拳と同時に打ち込まれていた。
「ぎゃぼらばっ！」
思わず口から内蔵が吹き出しそうな衝撃に、身体があり得ない角度に曲がりそうになり……そのまま春告の肉体は氷上を飛んだ。
氷を抉りながらの着地は、着地というより擦り下ろしの刑罰だ。何度もバウンドを繰り返し、その度に強烈な衝撃が、春告をあらゆる角度から責め立てる。
「ほらほら、どうした、立て立て。レディファーストで先手もらったけどさ、本当ならジェントルマンがレディをエスコートしてくんなきゃ」
ふざけんな、と本音が漏れそうになった春告は、それでも打ち身が鈍痛に変わるにつれ、静かに氷の大地に両足で立つ。
「こ、こんな威力で、一般人相手にしていたら、死人が出るでしょ！」
傷害致死で警察から指名手配されているという噂も、案外真実かも知れないと思えてくる。
「失礼な！　手加減せずに殴ったの、これが初めてだって！　憎いね、この。オレの初体験はハルのものってわけだ」
（こんな初体験いるかっ！）
頭の中で円グラフを思い浮かべた春告は、脳容量の半分を氷床造成に割り当て、残り半分を慣れない格闘にセットする。
（蹴る？　殴る？　それとも急所？）
まともに喧嘩をした経験もない。
兄弟がいたならともかく、一人っ子のくせに他人に譲ることを信条としていた春告は、これまで譲れない何かのために拳を振るった記憶がない。

（結局、真正面か！）
考えたところで、実戦に役立つ何かが思い当たるわけでもなく、春告は愚直にまっすぐ、全推力を拳に回して特攻した。
「潔いけど、頭は悪い！」
読まれ、避けられ、蹴られる。
直線運動は直角に折れ曲がり、春告は横回転しながら氷床を突き抜けて落水した。
（なんだよ、これ。話にならねぇ）
まず、相手の動きが見えない。見えないものが参考になるはずがなく、お手本がないのにいきなり創作できるのは、一部の天才か馬鹿だけだ。
「ふっふ～ん。余裕余裕。あんまり余裕だから、恥ずかしい過去でも語っちゃうかな」
いっそこのままクリオネを探して漂っていようかとも思った春告だったが、ふきのの言葉に意識をとられた。
「オレがどうしてガイアギアに変身してるのか、話したことなかったもんね？」
それを言うなら、自分がどうして此花に選ばれたのかも知らない春告だ。興味が無いなんてツンデレでもなきゃ言えない。だが、ふきのはそのまま黙る。
（拳で語れ、か）
恐らく、打ち合いがそのまま、会話となり、話の続きにするつもりなのだろう。続きを知りたかったらかかってこい、という遠回しの催促か。
（ひょっとしたら、此花の目的が分かるかも知れないし）
午前中、近衛と二人で死にかけた、此花の行動原理の解体。あれはアパートという此花フィールドで行った愚行だったが、なるほど北極まで、あんな魔術は届くまい。
故意か偶然か、今日は全くといっていいほど、此花や薺からのチョッカイが入ってこないのも都合がいい。

（だったら）
春告は水中を進む。澄み切ったアイスブルーの海水を貫いて、目指すはふきのの足下直下。
（いや）
そこを追い越し、背後から。
（創意工夫しろって、言われたしな）
春告の念が、六つの行動を同時に起こした。
水流に念を込めた、氷を突き破って吹き出す水柱が五本。ほとんど同時にふきのを取り囲んで、
「背後？」
「と見せかけて」
相手の裏の裏をかく。振り返ったふきのの背中の氷を突き破って春告は、更に相手の直上まで高度を取り、
「天空、×字、アタァァァァァァッ」
結局、体当たった。
「少しは、頭、使ったわけね」
だが、受け止められる。両手で春告の投身攻撃を掴み取ったふきのは、そのまま、春告を頭から、氷のマットに突き刺した。
「だったら、頭、冷やせって！」
首まで見事に氷に埋まり、そのまま逆立ちで身動きが取れない。
「オレはさ、昔っから、夜の街をぶらついてたんだ。家に帰りたくなくってさ、だからって不良グループなんかに混ざるのゴメンで、今と変わらず、正義の味方ごっこばっかり、してたんだ、よ！」
ふきのは春告の両足を掴んで氷から引っこ抜くと、そのまま両足を腰部分にホールド、ジャイアントスイングに移行する。
「オレは、両親が、大っ嫌いでさ！　夜に一緒の家にいたくなかったから、二人が仕事に出かける朝に、帰る生活してたん、だ！」
猛回転にも関わらず、彼女の言葉は歪みない。
「結局そのまま夜型スタイルだよ。で、高校生の不良グループから、チンピラに噂が伝わって……ヤクザに取り囲まれて事務所に連れ込

まれてさ、本気でヤバいってカチカチ歯を鳴らしてたときに、此花に助けられたの、さ！」
いったい何回転したのか。ひょっとしたら指先あたりは音速を超えていたのかも知れないと思いながら春告は、万歳スタイルで明るい夜空をアイキャンフライ。
ジャイアントスイング中にウィルゲムを通して脳内に伝わってきたのは、今より数年若い、高校時代のセーラー服着た唐守ふきののイメージで、
（普通に、かわいいじゃんかよ！）
分からない。どうしてふきのが夜の街に逃げなければならなかったのか、理解できない。家族の問題？　帰る場所がなかったから？
けど、だって、友達とかは……考えている間に春告は、華麗な放物線を描いて剥き出しの海面に落下した。眼下で白クマが、感情の籠もらない瞳で春告を追っていたのが印象的だった。
春告は沈む……極北の海へ、思考の渦へ。
ふきのの過去が、掴まれた脚から流し込まれた記憶が、春告の中で渾然一体となって脈絡なく現れては、消えていく……。
「そうか、じゃぁ」
春告は、納得した。
彼女に感じていた、親近感の正体を。
どうして自分が、此花のアパートを逃げ出さないのか……その根元的な意味を。
光が届かない深度まで達して春告は、ようやくふきのと向き合う覚悟を決める。
相手の事は、分かった。
乱暴なやり口ではあったけれど、彼女の言いたいことはよく、伝わった。
「今度は……」
僕の番、か。
しかし、春告には、胸を張って主張できるほどの理由はない。あ

の日、春告が生まれて初めてのサボタージュに至ったのは、前日の放課後に、教室に残っていたクラスメイト達の嘲笑を聞いてしまったからだ。
何故、いつもなら聞き流すだけの悪口が、あの日に限って春告の胸を抉ったのか。
分からない。分からないが、黄昏時、逢う魔が刻、夜がその首をもたげる紅い夕焼けの中で、春告の耳に挿入された笑い声が、今も思い出すだけで、頭蓋に反響して止まらない。
朱と影で彩られた、墨絵のような世界。男子生徒のみならず、女子生徒を織り交ぜて、総勢十名ほどが司馬春告という存在の否定を肴にして……まるでバラエティ番組を取り囲む家族の団欒のごとく、屈託のない笑顔と談笑を弾ませていた、あの夕刻に、春告は壊された。
木っ端微塵に。
塵芥すら残さずに。
未練という感情を……壊されたのだ。
それは、表面張力いっぱいまで水が注がれたコップにドロップした最後の一滴。
もしくは、物理的強度限界まで膨らんだ風船に触れた、研ぎすまされた針の先端。堅牢なダムに生じた、ミリ単位のひび割れのように。
故に、ただのキッカケ。
既に断崖絶壁に追い込まれていた春告の、背を押した慈愛の手。
司馬春告にまだ、立ち直る気力が残っていた最後の瞬間に、奇跡的に此花と巡り会う機会をくれた、運命のイタズラ。幸運の女神の前髪。
あの日、高校生活への別離を真剣に考えたあの日がなければ、春告の今はなかった。
鬱ろな心を、虚ろな心を抱いたまま、ただ生気を失っていくだけの生を、全てが風化していくだけの営みを、手遅れになるまで送っ

ていたに違いない。
だから、今の春告ならば、あの日の彼らに感謝すら、言える。壊してくれてありがとうと、絶望をくれてありがとうと……再生は、破壊のあとにしか訪れないのだと、実感をこめて告げることができる。
だが同時に、あの日はキッカケでしかないのだ。
根本的な部分で、春告は、絶望への行進を続けていくしかなかったのだ。
その想いを、念を、ウィルゲムに込めて。
春告は、シャインダークは、光を放って推力を得る。
海面を割って、飛び上がった春告は北極の空を征く。
白い空と、白い氷に挟まれた世界。
黒い海が、凶々しく白を浸食している世界に、紅、一点。
白を貫くように輝く紅の女が、夜を制する王として、凛と空を見上げている。
「なる……ほど！」
春告は、離れて着地する。
相対すが、言葉はかけない。
今の夜王に応えるには、シャインダークも構えるしかない。
夜王は、凍気を高めている。
両足を広く開き、上体はきつ立、両手を体幹に沿わせて真っ直ぐ空へ伸ばし、両の掌を固く組み合わせて形作るは水瓶の姿、視線は真っ直ぐに春告を射抜く。
そのバックに、水瓶を肩に担いだ美少年が幻視できるほどの、見事なポーズだった。
闘志ならぬ凍志の高まりは、夜王の周囲を急激に凍結させ、大気中の水蒸気までが氷と化して、ダイアモンドダストを形作る。
（あれに対抗するには！）
一瞬の逡巡が生じる。
選択肢は、二つ。水瓶宮か、北氷洋か。

そして春告は、両手を開いて互い違いに向かわせて、その胸元に凍気を錬成するイメージを、ウィルゲムに送信した。
ネタ的には既にその時点で負けが確定なのだが、場所がシベリアの延長戦上であり、設定的には沈没船の眠る海の上であるなら、そうするのが筋だと思ったからだ。
聖なる闘士なら、想いを極限まで凝集、爆発させることで、その手の平のなかに絶対零度すら生み出せるという古き言い伝えを、春告は信じているわけじゃない。
しかし彼の胸の前に生み出された凍気は、周囲の空気中の水蒸気すら凍り付かせ、透明な大気に七色の輝きを放たせる。
燃え上がれば燃え上がるほど凍てつく、矛盾する理。
だが二人にとって、それは良く知った感情だった。
身を焦がすような怒りは同時に、あらゆる周囲への関心を凍り付かせる。
泣きたくなるほど胸を締め付ける切なさを裏切られた悲しみは、愛憎表裏、静かな怒りとなって心の澱に固形され、人格の一翼として社会に敵意を剥き出しにする。
唐守ふきのと、司馬春告。
二人の心の奥底で燃え続ける凍り付いた怒り。
なぜ、夜の街で時間を潰さねばならなかった。
なぜ、真昼の公園で自己の消滅を願わねばならなかった。
どうして、此花に出会って、救われたなどと感じなければならなかった。
（簡単な理由だ）
社会から、弾かれたと、身を持って感じたからだ。
自分という個性が、今の時代の社会にマッチングしないと、痛感したからだ。
学校教育というシステムに迎合できなければ……あの国で、十代の青少年が生きていける世界など……ましてや夢や希望を育める環境など……ほぼ、無に等しい。

そしてふきのと春告の個性は現況のシステムには馴染めず、二人は自然と、社会そのものへの適合を、自分という個性の否定を、諦めたのだ。

そんな、ありふれた不幸が。

どこにでも転がっている悲劇が。

今の二人を出会わせ、ガイアギアを通じて、極低温の向かい合わせを生んだ。

今や二人は渦巻く冷気の谷底にあり、周囲の空気を文字通り凍り付かせながら尚、更にその凍気を高ぶらせる。

怒りというものが、その激しさをもって前進へと身を向かわせる正の力ならば、二人のそれはどれだけ燃え上がらせても、深めても、決して彼らを前進には導かない、全ての意志を凍らせる負の炎……虚無だ。

今、冷気という名を借りて、二人の虚無が空間を凍らせていく。

それは足下の氷床を厚く、そして広大に海を渡らせ……零下の感情の波は、複雑に絡み合って更に、北極の海を凍り付かせる。

（オレらにとっちゃさ、ハル。みんなから祝福される結婚だとか、社会的に認められる成功なんて言うのはさ、口にするのも馬鹿馬鹿しい、夢なんだよ。

しかもそれは、絶対に叶わない夢だ。想えば想うほど、強く願えば願うほど、自分で自分を絶望の沼に沈めていく、地雷さ。

分かるだろ？

ハルはどうだか知らないけど、オレは両親を好きになるわけにはいかなかった。両親を憎むことでしか、自分に生きる活力を見いだせなかった……だからって、自分が、社会不適合だなんて、誰にも言わせるわけにはいかなかった！）

（分かるよ、その気持ち……本当は分からないけど……でも、多分、根っこでは同じなんだと思う。

僕は、別に、みんなと違くあろうとしたわけじゃない。自分では普通だと思って行動したことが、周囲に受け入れられなかった、そ

れだけなんだ。
何が正しいとか、誰が正解だとか、どこにも書いていないし、審判がいるわけでもないのに、僕の行動はいつもいつでもアウトになって、他の子と同じようにしたって、僕が僕であるって理由だけで、僕はいつでも弾かれたんだ）
（オレも、草香（そうか）も、薺（なずな）も、多分（このえ）近衛も……此花は言わずもがなだよな、なんたって魔女なんだから。
とにかくみんな、訳も分からずに除け者にされた人間なんだよ。勝手な理由で差別されて、一方的な正義で裁かれて、少数派で、マイノリティで、何を言っても聞いてもらえない、ただ主張するだけで睨まれる……そんな存在価値を、押しつけられたんだぜ。
考えてみりゃ、オレらは、ただいるだけで、社会から排斥される存在なんだ。常識とか、コモンセンスとか、社会倫理とかの適用除外を申告されて、根拠もないのに蔑視されるような人間なんだ。
だからさ、おかしいんだよ。悩むだけ、無駄なんだよ。
正義とか、悪とかさ。
社会にとけ込めずに、どうして社会正義を唱えられるんだ？
オレは最初から、オレだけの正義を信じて、夜の街で叫び続けていたんだぜ）
（僕は、父さんを、殺してしまった……。もちろん、故意じゃない。故意なんかじゃない。父さんは、突き飛ばされて車の前に飛び出した僕を庇って……笑いながら、死んだんだ。
格好いいだろうって。子供を守って死ねるなんて、最高に男らしい死に方だって。
でも、僕はその時、分かってたんだ。
僕を突き飛ばしたのは、多分母さんだったんだって。
この世で一番、誰よりも父さんを愛していた母さんにとって、父さんとの愛のオマケとして出来てしまった僕が、目障りなんだって、分かってたんだ、子供でも。
僕が、なんの努力もしないで、ただいるだけで父さんの愛情を奪

っていく存在だったから……母さんにとって僕は、父さんとの二人きりの時間を邪魔する存在でしかなかったから……だから、あんな悲劇が起きて……なのに、肝心の僕が無傷で、父さんは何も知らないまま、満足気に笑いながら死んじゃって。

それから今日まで、どうして母さんは僕を殺さないんだろうって、ひょっとして今夜あたり殺されるんじゃないかって、そんなことだけを考えて生きてきた。

母さんは、本当に父さんを愛していたから。深く強く、熱く誰より、愛していたから……息子のことすら目に入らないくらいに、愛していたから……なのに父さんは、最後の最後まで、僕だけを見つめて、死んでしまった。

僕も、だから、もう、家には帰れない。帰っちゃいけないんだ。

学校にだって、いられない。

みんなが当たり前だと思っている幸せを、僕は信じられない。家にいるだけで殺されるかもって、そんな毎日を普通だと思う時点で、僕はみんなと同じ地平にいられない。

それでも、僕は、死にたいとだけは、思わなかった。

消えたいと願って、此花に叶えられて……でも、死にたいとだけは、願ったことがないんだ。

僕が死ぬくらいなら、世界が滅ぶ方が筋だってすら思ったんだ……だから、妥協点は、僕が消えることしか、無かったんだ。

僕は、自分が納得していないのに、周囲に受け入れられなかったからって、死にたいなんて思えない。

だって、僕は、自分だけが間違っているなんて思わないから。

みんなが同じように間違っているんなら、自分だけが死んでしまうなんて、不平等だ。

だから僕だって、僕が正義だと……いや、正義かどうかなんて、本当はどうでもいい。

国だとか、世界だとか、地球だとかだって……そんな名分を掲げるくらいなら、僕は、自分だけが信じる大儀を掲げる！

此花に協力することだって、僕の意思だ！　僕だけの大儀だ！
僕が幸せになるかどうか、みんなのためになるかどうか、そんな事はどうだっていいんだ！
僕は、僕が信じられるものを貫こうって、そう、思えるように、なったんだ、やっと！
そのための、意思を表す力に、遂に出会うことが出来たから！）
無念とは、夢念だ。
残念とは、念が残っているからこそまだ、進行形だ。
ウィルゲムは、念を力に換える触媒。
主の念が強ければ強いほど……
（光なんてな、幸せなんてな、強く輝く世界の中に置かれたら、周囲に紛れて見えなくなる程度のもんなんだ！）
（闇が深ければ深いほど、影が濃ければ濃いほどに、蝋燭の灯火が、太陽みたいに煌めくんだ！　星の輝きが、夜の闇でないと見えないように！）
（だから、オレは！）
（だから、僕は！）
（（不幸であったことを、誇る！！））
「「オーロラ！」」
「エクス」「キューション！！」
「ボレ」　「アリス！！」
夜王の拳が降り下ろされ、シャインダークの冷気が臨界を迎えて弾けた。
あらゆる物体を凍り尽くさんと、二人の念が北極に炸裂する。
凍気が、凍気をむさぼりあい、互いの凍気を飲み込みながら駆け抜ける。
衝撃に弾かれた氷弾は、着地と同時に氷の大地の熱を奪い、海中へと凍気の腕を伸ばしてまだ止まらず。
冷気の渦に遮られて運動を滞らせた風のエネルギーは、更なる大気の流れを中心へと落とし込む。

ふきのと春告を中心に、黒の海を白の輝きが埋め尽くしていく。
白夜の太陽の輝きが、白の鏡に反射して、目も眩むような白光を宇宙へと弾いていく。
陽光を拒絶する純白の大地が、拒絶するからこそ、黒き海を白の光で埋め尽くす。
夜の地球で、太陽の沈まぬ北極が、真夜中の夜明けのごとく、光子の瀑布を爆ぜていき……遂に、二人の周囲で、あらゆる運動が、停止した。
絶対零度と呼ばれる境地。
超電導がエターナルサーキットを駆け抜ける世界。
互いの凍気に呑まれて氷像と化した両者が、微動だにせず対峙した。
次の瞬間、ＧＡＩＡ理論によって恒常性を旨とする地球の自動気候修正機構が、轟音とともに制止した世界を破壊する。
あらゆるモノは、あるべきように。
許されざる変化は、砕け散り。
北極の氷床と、生物たちの日常が保たれるレベルまで、まるで最初から計画されていたかのように、シーソーはバランス点を導き出す。
「さすが地球……手強い」
「いや、感心する前にやりすぎたことを反省しましょうよ」
二人のガイアギアもまた、主の生存という本能を全うすべく、その凍結を解除する。
「いやぁ、やれば出来るもんだなぁ。こりゃ、本気になったら生身で光速も可能じゃない？」
「それ、アクセルフォームですか？　それともクロックアップ？」
「なんで年代すっ飛ばすかな」
「いや、装着モノっていうより、僕ら変身モノですから」
「変身モノって言えば、シャインダークの変身プロセスって、どんなの？」

「変身……プロセス？」
「いや、ハルのそれってメタルヒーローっぽいから、０，０５秒で変身完了して、スロー再生で変身プロセスをもう一度っていうのじゃないかなぁって」
「……夜王はあるんですか？　変身ポーズ」
「ん？　オレの場合はこれよ」
そういってふきのが取り出したのは、手のひらに収まるくらいの大きさの、回転弾倉式拳銃で。
「光の弾で空中に北斗七星描いて、『七星変化』って叫んで魔法少女チックに変身すんの」
（二十歳の成人が魔法少女？）
口に出さないのがエチケット。
「で、あんたは、ないの？　蒸着とか赤射とか焼結とか瞬着とか、そういうの」
「強いて言うなら……」
春告の右腕が天を目指して伸ばされ、
「カドゥケウスを掲げて」
「テ〇クセッター！」
「……それ、メタルヒーロー違いますから」
「でも、シャインダークの場合は、せっかくなら五芒星を描くってのはどうよ？　こう、陰陽師的に。ていうか、名前がすでに陽と陰なんだから」
「それも、此花が動画用にとっさにつけた名前っぽいんですけど」
「んなら、両手を前に突き出して、指先で五芒星を描くってのは……」
そういって、二人で両手を前に突き出して、指先をなんとか五角形に揃えようと、
「だ、駄目。つ、ツル！　ツッちゃう！」
「こ、ここまでして変身する意味がないでしょ！」
結局、春告の変身バンクシーンは保留扱いとして、

「まぁ、なんだ。話戻すけどさ」
ふきのは、すっかり凍り付いた周囲の景色を満足そうに一望すると、親指を立てて左腕を春告に突き出し、
「戦闘の要は妄想具現化ってことで！」
「戦闘センスが涙目で逃げてく発言ですね、それ」
「いや、ここまで出来るんなら、むしろ中二設定で突っ走るのもありなんじゃないかって」
「そんな、なんだかわからんが、とにかくよしって勢いで良いんですかね」
「その台詞を私に言わせたいんなら、ハルはここで全裸にならなければいけない！」
「そんな事言って、生身に鉄球撃ち込む修行に移行するんじゃないでしょうね！」
「修行なら脱ぐんだ！」
「どこに需要があるんですか、どこに！」
「じゅる」
「最低だ、この人……」
「まぁ、なんていうかね」
「なんです？」
「世間はともかく、信じる大儀に殉ずればいいんじゃないの？　オレら」
あぁ、つまり。
「此花が正義であろうがなかろうが……信じる限りは付き合え、と」
そうそう、とふきのは大きく頷いて。
「少なくとも、此花はオレらに、生きてる理由をくれたんだからさ」
そうか、と春告の胸に、ストンと何かが落ちていく。
「正義なんて、形のない何かに責任を押しつけたら、そりゃ偽善だよ。
それにさ、ハル、知ってるか？
エコってさ、依怙贔屓のエコなんだぜ？」

いや、本当はエコロジーでしょ、と心中突っ込みながら、
「地球に肩入れしたらエコで、人間に肩入れしたらエゴってことですか？」
「むむむ、誰が巧いことを言えと」
「とりあえず、しばらくは……ま、此花を依怙(えこ)してあげよう、ですかね」
結論が、出た。
「そうそう。あっちが立ったらこっちは立たないんだから、どっちつかずじゃなくて、自分の立ち位置シッカリしとけってだけの話」
それが、つまり……今朝の上映会で悩んでしまった春告に対する、ふきのなりの講義だったのだろうと、春告は思った。
ふと、時刻を気にしてみれば、いつの間にか日本時間では日の出を迎えようとしている。
「いけね。今朝は畑の手入れしないと」
「んじゃ帰りはさ、裸つながりで、廬山亢龍覇(ろざんこうりゅうは)やってよ。んで、オレにも宇宙見せてよ」
「それ以上裸にこだわると、成層圏から地上に蹴り落としますよ」
直後、二人の冗談を引き裂く通信が、極東の魔女から入電した。
「二人とも、即ユーターンじゃ！
日本海挟んだバカたれが、懲りずにミサイル撃ち込んでくるぞっ！」
迂闊でも月曜日でもない日本に、非常事態宣言が発令されようとしていた。

第6話　緊迫っ！　飛翔体舞う、絡み合う空

ほとんど徹夜明けにも関わらず、春告(はるつぐ)は一路、陰謀の暗雲渦巻く日本海へとその身を飛ばす。

「薺(なずな)、状況を教えて」

その日の作業内容を、あらかじめ薺に文章で送ってもらうのが春告の習慣だったが、

「あの、薺、さん？」

送られてきた文章に、呆然とせざるを得ない。

画面の端から端まで続く文章が、句読点も行換えもないまま数ページ、おまけにノベルゲームでｃｔｒｌキーを押したがごとくのスキップ速度で送られてきた。

「ごめん。読めなかったから、もう一回」

再度、画面の端から端まで続く文章が（以下略）。

「どしたん？　ハル」

薺の態度に面食らった春告に、かかる声は背後から。自身には飛行スキルのない夜王(ナイトライダー)が、春告の背中に仁王立ちで居候中。

「いや、薺が、ご立腹で」

「あぁ、まぁ、帰ったら謝っとけな」

「なんで僕？！　北極で氷張っただけで？！」

「そりゃ、ハル。一晩ほかの女と遊んでた旦那から仕事の都合だけで利用されたら、普通怒るだろ、本妻」

「遊んでないし、夜王は仲間だし、薺とは世間話したことないし、第一本妻じゃねぇですし！」

「突っ込みどころ満載だな」

「あぁ、もう、此花(こはな)！」

肝心なときに親身になってくれる味方がいない哀愁を噛みしめて、よりによって一番話が通用しない相手を頼らねばならない。

「そもそも、ミサイル発射って、どこの情報なんだよ」

徐々に東の空を明るくする黎明の光を受けて、シャインダークの白銀が漆黒に浮かび上る。
日本海での緊張が発表されたのが深夜だとしたら、騒動が本格化するのはこれからだ。
「ネタ元はアメリカからじゃ。朝鮮民主主義人民共和国と、中華人民共和国の両国で、事前通告のないミサイル実弾発射演習の準備が行われおるってな」
「けど、演習だったら、直接的な被害はないわけだろ？」
「通告がないっていうのが問題なんじゃよ。北朝鮮は分からんが、中国軍じゃ日本に届く弾道ミサイルが準備されとる危険性があるらしいしの」
「けど、んな、なんで！　宣戦布告もなしに、しかも国連常任理事国が、そんな横暴まかり通るわけないでしょ！」
「そりゃ、向こうだってハナから日本を狙うなんて言わんじゃろ。ミサイルの誘導装置が故障して、偶然、日本海に向かってしまいました、テヘ、くらいはやりかねんが」
「んな、無茶苦茶な」
「実際、憶測だけが飛び交ってて、内閣も混乱してるんじゃ、現状。なのにアメさん、偶・然、演習のために出航していたイージス鑑に早々と出動命令出して挑発的でなぁ。
政府はとにかく、夜明けを待って両国政府に演習の意図を質す姿勢で、自衛隊は命令待ちで満足に展開できん状態での」
「ちょい、割り込みゴメ。相手がこっちの混乱読んでてさ、夜明けと同時にミサイル撃っちゃったらどうすんの？」
「そんな乱暴……」
「たぶん、それが目的じゃろ。日本が正式に抗議する前に全部終わらす腹じゃな。大体、胡散臭いのがアメリカの動きでの。北朝鮮はともかく、中国でそんな大規模な動きがあったら、何らかの情報を掴んでおるじゃろうに」
「ひょっとして、アメリカお得意のリメンバー作戦？

先制攻撃させておいて、『リメンバー〇〇』をスローガンに、目には銃口、歯には核で、敵性因子殲滅大作戦」
「でもなぁ、動機がないんじゃよ、今回。
リメンバーアラモは西部を征服する大義名分が目当てじゃったし、リメンバーパールハーバーはアジアの植民地化の足がかりに日本が邪魔だったからだしの。
リメンバー９１１は、結局イラクの石油利権が目当てで……アメリカって国は、口じゃなんだかんだ言っても拝金主義だってハッキリしてるからな。
今更北朝鮮を叩いても、甘みが無いはずなんじゃが」
「……あれじゃない？　ドル体制が崩壊して世界多極化する寸前に、最後の意地でライバルの中国を叩いておきたいって腹」
「じゃとして、そんな安い動機も読めずに、中国が踊らされるとは思えぬ。これ以上北朝鮮を庇っても、国際世論には勝てぬしな」
「だぁ！　高校生男子にも分かるようなレベルの話をしてくれ！」
文字通り頭ごなしに続く政治話題に、キレやすいと評判の今時の若者が叫ぶ。
「なによ、中退」
「そうじゃ、自主休校」
「こ、言葉の暴力！　てか、なんで逆ギレ気味！」
「実際に何かあったら、考えている暇なんかなくなるんだから、今のうちにあらゆる可能性を考慮しときなよ、厨二病」
「そうじゃそうじゃ。すべての思惑を見通して初めて、事態を打開する究極手が打てるという大局観持てずに、これからの社会が渡れると思うなよ、童貞」
「格好良いセリフの最後につけたって、セクハラ発言は誤魔化されるか！　これ以上言うなら、夜王この場で落とすよ、本気と書いて、マ・ジ・で！
んで、結局、僕はどうすりゃ良いの！
ミサイル迎撃するわけ？　それとも迎撃ミサイルを妨害しろと？」

「慌てる乞食は貰いが少ないぞな？」
「優れた話し家は、ちゃんと最初に結論提示するもんだよ。
というか、現場作業員は僕なんだから、雑談したいんだったら余所でしてよ！」
「政治話を楽しめんとは、まだまだガキじゃの」
「でも、実際ハルをどうするの、此花？
どうせ今頃、人工衛星とXバンドレーダーで、日本海から中国大陸までリアルタイムで監視されてるんでしょ？　イージス艦でばってるんなら、第二フェイズで巡航中のミサイルを迎撃出来るんじゃない？　エアボスに出動命令下ってたら、更に命中精度上がるだろうし、どうせ千歳とか三沢だって、スクランブル態勢整ってるんでしょ？」
「そうだよ。そんなど真ん中にわざわざ出ていったって、発見されるだけじゃんか」
「いや、それが心配でな。今回のミサイル、迎撃させとうないんじゃ」
「「は？」」
春告と夜王の疑問が重なった。
「迎撃させたくないって……日本にミサイル落としたいの？　P2とか2ndGIGとか東〇エデンみたいに？　腐敗しきった日本を目覚めさせるとか、そんな理由で？」
「そりゃ、此花が日本の現状大嫌いなのは分かるけどさ、他人の褌（ふんどし）横取りして、相手に責任だけ押しつけるっていうのはちょっと、関心できないわ」
「誰も、日本に落とせなんていっとりゃせんわい」
「……んじゃ、発射前を押さえろってこと？　中国と北朝鮮に乗り込んで、ミサイル発射基地を奇襲しろって？　一人で？」
「そんな事したら、オタク大国日本が作った秘密兵器って見出しで、それこそガイアギアが世界デビューしちゃわない？
それとも此花、あんたまさか春告使って、逆宣戦布告をやらかそ

うってんじゃないでしょうね？
そりゃ、此花が現状の中国の民族弾圧政策を嫌ってるのは……」
「人の話を最後まで聞かんかい！　ったく、お前らはたかがミサイルくらいで興奮しすぎじゃ。戦争くらい、珍しいもんでもなんでもなかろうて！」
（戦争体験してるなんて、七〇歳オーバーを宣言してるもんじゃんか！）
あやうく口から飛び出すところだったセリフを飲み込んで、春告は此花の言葉を待つことにする。
良く晴れた海上に雲は少なく、東の水平線にかろうじて日本の島影が貼り付いて見えるその向こうは、空が群青から紫紺へとグラデーションを彩り、夜をジワジワと西の地平線へと追い込み始めていた。
（今日も昨日も……たぶん百年前も、一万と二千年前も、一億と二千万年前だって、こうやって日の出は同じなんだろうな）
やがて太陽がその頭を覗かせれば、堰を切ったように光の洪水は地上に流れ込み、世界を輝きと暑苦しさに埋め尽くしていくのだ。それこそ、明日も明後日も、百年後も一万と二千年後も、一億と二千万年先であろうとも。
日の出という神聖な光景に心まで浄化された気持ちがした春告の耳に、それがどうしたお構いなしと、此花の宣言が突き刺さる。
「ミサイルを、爆発させずに、落とすんじゃ、ハル！」
「「はぁ？」」
言っている意味が分からない。
「今回のミサイル……個人的な予測で悪いがな、恐らく、都市の爆撃が目的でない」
「えっと……単刀直入に質問していいですかね、此花さん」
思い当たる節がありすぎて、春告は口を挟まざるを得ない。
「それって、また、アーノルド絡みってこと？」
「当たらずとも遠からずじゃな」

開き直られた。
動揺すらしねぇ。
「じゃ、いったい何が目的で、国際社会巻き込んで、無用な混乱を引き起こそうとしているわけ？　というか、昔の此花は、いったい何をやろうとしてたの」
春告が、口調も堅く攻めに行く。
此花も説明責任を感じてか、いつもなら窘(たしな)めるところを、スンナリ素直に白状した。
「大気圏高層への、二酸化硫黄の散布じゃ」
「「二酸化、硫黄？」」
ふきのと春告の当然すぎる疑問に、此花の解説が続く。
曰く、その狙いは一昨日の赤道での雲の製造と同じであること。
曰く、大規模な火山噴火などで噴煙が成層圏まで達すると、噴煙に含まれる二酸化硫黄の影響で、相当な冷却効果があったとのこと。その際二酸化硫黄を含んだ雲は、太陽光を宇宙へと跳ね返す、大気的な鏡の役割を果たすこと。
かつて此花はその原理を研究し、飛行機か、又はミサイルにて、高層に二酸化硫黄を
散布するプランを練っていたらしい。
そして太平洋という広大な海をカバーするために、偏西風に乗せて二酸化硫黄を拡散させる方法を思いついたのだと。
「なんで、そんな強引な手段を……」
「あの頃はまだ、世間が温暖化問題をまともに取り合ってくれんでな。いっちょ世界を驚かしてやろうと、色々画策していたもんじゃが……飽きてな」
「飽きたって、此花らしいというか、何というか。
とにかく、それが今回の、ミサイル発射の目的だっていうの？」
いまいち納得できない口調でふきのが問えば、
「五分(ごぶ)じゃ、と見ておる。どの道、ふつうのミサイル攻撃だとしても、見捨てておくわけにはいかんがな。

ミサイル防衛だイージス艦だパトリオットだと自慢した所で、命中率一〇〇パーセントを誇る迎撃方法は未来永劫確立できんどころか、物量作戦で攻め込まれたら使いものにならんのが実状じゃ。
わっしは今回、中国と北朝鮮併せて、実験と中古廃棄の名目で、五〇発は打ち上げると考えておる」
五〇発。
それは、どう考えても戦争行為であり、とてもじゃないが、人工衛星の打ち上げなどという戯言では誤魔化せない数字だ。
「でも、たとえそうだとして、一体どうやって止めるの。
打ち上げ前に叩かない。
空中でも爆発させない。
おまけに地上の迎撃は信用できないって、八方塞がってる気がするんだけど」
特に現場作業員たる春告にとっては、生身一つで五〇発ものミサイルと対峙しなければならないのだ。
一発二発なら意識も追いつくだろうが、脳内で何かが弾けた状態の多砲塔無敵人型兵器『自由号』の無差別同時ロックオンが利用できるならともかく、春告個人には、そこまでの同時併発的処理能力はインストールされていない。
「その点は、薺に任せておけば大丈夫じゃ。春告はデブリ処理で知っているじゃろうが、あの子の空間把握能力と同時多発的変化に対する適応能力は天性の技じゃからな。ミサイルが二千発飛んでこようと対応してみせると豪語しておったでの」
瞬間、「言ってない！」とかわいらしい抗議の声がスピーカーから漏れてきて、リアルタイムで初めて聞いた薺の声に、春告の心がキュンとした。
が、現実は全然甘くない。
「だからって、方法は？　具体的な」
「現場担当者に一任」
「無責任な！」

「んじゃが、北極に氷張るようなインチキな魔術使える男が、ミサイルを空中で止める妄想くらい、ポンポン思い浮かぶじゃろうて」
「ハル～。お兄さんからアドバイスだ。
お前の翡翠、ジェダイトからネフライトに換えておいたからな。いつもよりもソフトな対応を期待していいぞ。
あと、ウィルゲムの力を過小評価すんなよ。カドゥケウスで石を繋ぐのは、あくまで効率の問題だかんな。ウィルゲムそのものは、単独で使ってもちゃんと力を発現する優れもんだってこと、忘れるんじゃねえぞ！」
鼓膜が破裂するかと思うほどの声量は近衛（このえ）だ。
直後に此花に蹴飛ばされたらしく、悲鳴と同時に、「お前は作業を進めてろ！」と此花の怒声が追い打ちをかける。
「……それより、問題が一つあるんだけど」
春告は、無視できない案件を切り出した。
「夜王、どうしよう」
シャインダークよりウィルゲムの数が少ない夜王には、必要性がなかったことから飛行能力が付与されていない。
故に、今はシャインダークの背中に乗っている状態なのだが……どんな方法を採るにしろ、ミサイルを止めるという荒行を、人間一人背負ったまま満足に出来るとは思えない。
と、草香（そうか）の声がヒョッコリ割り込んで来た。
「捨てちゃって、おけ」
「いいわけあるか！」
誤差ゼロでふきのが突っ込むも、
「大丈夫、私が承認」
「オレがド却下だ！」
「全力で投擲、ゴー」
「さすがに死ぬって」
「私とふきの、どっちを選ぶの？」
「どこでどうしたらその選択肢？」

しかし、いつミサイルが発射されるか不明な状態で、夜王をわざわざ日本へ送り届けている暇はない。
だからと言って、草香が言うように、ふきのを空中で投げ飛ばすのも、人道的にどうなのか？
アドベンチャーパートにおける、どっちの好感度を重視するかの分岐のように、真剣に悩み出す直前に、
「ハル、だいじょぶ。今近衛に、飛行ウィルゲム組ませてるから、えっと……」
勢い込んでマイクを奪った此花が言い淀み、「あと一〇分！」その背後から近衛の絶叫に近い訴えが聞こえてきて、
「あと五分、待て」
「ギャァァァァァァァァァァァァ！」
生まれて初めて、ギャァァァなんていう本気の大悲鳴を耳にして、春告は苦笑せざるを得ない。
「それが完成したら、オレもここで戦えるのか？」
ミサイル防衛という燃えシチュエーションに興奮していた夜王だったが、
「あんたはとっとと帰ってこい。飛べない人間わざわざ浮かす為に、薺と草香の二人でウィルゲム発動させなきゃいけないんだから」
此花に無惨に断られた。
本気でガックリ落ち込むふきのに悪いと思いつつも、そのやり取りに頬が緩むのを春告は実感する。
「というわけで、ハル。下からもミサイル飛んでくるからの。正直大変だと思うけど、他人事みたいに頼むわ」
「了解。絶対の自信なんてないけど……薺がバックアップしてくれるなら、やらなきゃ駄目でしょ」
以降、夜王の飛行オプションが完成するまでに、春告のヘルメットの中では、予想弾道進路のシミュレーションが展開される。
同時に、現状のイージス艦の展開と、スクランブルした航空自衛隊機の迎撃航路を予測。

現状のシステムでは、人工衛星がミサイル発射を確認して、内閣もしくは自衛隊本部、在日米軍本部に情報が届くまでに一分。そこから迎撃実行部隊に指令が行き渡るまでが数分。
イージス艦から発射される迎撃ミサイルは、弾道ミサイルが上昇フェイズを終了して、高々度にて水平移動する第二フェイズに実行される。
種々の条件を鑑みても、それは日本海上空、それも日本寄りでしかあり得ない。
「だったらとにかく、上昇終了直後くらいの段階で、ミサイル群に接触しないと駄目なわけだね」
「それでも、ミサイル進路予想範囲が広いでの。下手にヤマ張ると、逆にミサイルを追っかけなきゃならんぞ」
ヘルメット内、網膜に投射された極東地図に、ミサイル基地を中心とした弾道ミサイルの有効射程の円が重なる。
それはほぼ、日本全土をカバーしており、相手がもし本気で攻撃を考えているとしたら、どこでも狙われるという恐怖を意味していた。
もちろん、そのためのミサイル迎撃システムに、自衛隊は多額の予算を割いている。だがそれは、完璧ではあり得ない。そして迎撃失敗を確認した頃には、すでに対象ミサイルは終末フェイズに移行しているのだ。
（なんつうタイトなスケジュールだ）
現代戦が情報戦だというのは、一秒の遅れが数キロのミサイル進行を許してしまうという、その速度にあるのだろう。
真面目に検討すればするほど、弾道ミサイルを迎え討つという行為が、無謀以外には思えなくなる春告だったが、
（そのための、ガイアギアだ）
既に覚悟はできている。
此花を依怙すると決めた矢先だ。
それが中国と北朝鮮の蛮行だろうが、此花の過去の計画の怨霊だ

ろうが、彼女がやると決めたのなら、春告はただ、それを愚直に信頼して、現実とするだけだ。
（願えば、叶う）
それが、ウィルゲムなのだから。
そして、春告が知らぬ間に入れ替えられていたという翡翠を始めとした予備のウィルゲムがまだ、腰のボックスに納められている。カドゥケウスのそれを変更するなら変身を解かなければならないが、ウィルゲムを単独で使用する分には問題ない。
（ミサイルを止める、か）
その光景をイメージとして思い浮かべ、
（よし）
春告は、拳を固めた。
既に天球の半分までが光の勢力に覆われて、東の空はパープルから白く輝き、シャインダークを背中から照らしている。
睨み据える前方は、まだ闇の世界。
だがその夜は今、全速力で西の地平線へと撤退している。
星の明かりも絶えた、夜とは言えない紺の空に対峙して……足下の海が今、溢れる光の洗礼を受けて、今日というかけがえのない一日の始まりを、輝きとして奏で始めていた。

第7話　限界突破！　時を、かけよや、少年！！

翡翠(ひすい)は、二種類ある。

いや、正確に言えば、二種類の宝石が、かつては区別がつかず、等しく翡翠と呼ばれていた。

片や硬玉・ジェダイト。

古代メキシコで繁栄を極めたマヤ文明で、至高神としてあがめられたケツァルコアトルは、翡翠硬玉の神であった。翡翠で作られた仮面など、マヤ文明において翡翠は、呪術的な力を有する信仰の石である。

また日本においては、新潟県を唯一の産地として古墳時代まで、勾玉などの呪術品に翡翠が尊ばれて全国に広まっていた。この翡翠もまた、硬玉・ジェダイト。

片や、軟玉・ネフライト。

こちらは主に中国やニュージーランドなどで用いられており、彫刻を施され、災いや呪いを退ける力があると信じられてきた。

中国でヒスイとして加工されたものが、日本に入ることで硬玉と軟玉の区別が付かなくなったのか。それとも奈良時代に入った途端に消滅した硬玉勾玉文化が、中国の軟玉装飾品に取って代わられたのか。

事の真偽は分からない。

だがこの二つの石は、実に十九世紀に入るまで、違う成分、違う硬度であり、違う結晶構造を持っていることすら、解明されなかった。

実際春告(はるつぐ)も、実物を目にして、それがジェダイトであるかネフライトであるか、見極めることが出来ない。

（近衛(このえ)さんは石を換えたって言ってたけど）

胸元で力を発現している五芒星(セーマンパス)、カドゥケウスを見る。

その最上点、五点で最も上が、翡翠に割り当てられている。

その役割は、ディバイダー。念が変換された力を、複数の外部に割り当てる際、その力の割合を制御する働きを持つ。
昨日まで、そこには硬玉が輝きを放っていた。
今見下ろす軟玉もまた、一見しただけでは見分けがつかない輝きを放っている。
（細かい特徴とか見比べれば、別物だって分かるけど……同じように球に加工されてたら、分かんないよな）
やっぱり口に含まないと駄目なのだろうか。
それとも、羞恥心を捨てて、宝石との語らいに身を投じるべきなのだろうか。
それは、共に変態のやる事だ。
春告は頭を振って、雑念を追い払った。
（危ない。馬鹿な妄想に取り憑かれるところだった）
ともあれ、カドゥケウスにはネフライトがある。
その証拠として春告は、それまで１０対象にしか分散できなかった力が、三倍の３０対象にまで増えていることを、スペック表を呼び出して確認した。
（本当に、別の宝石なんだ）
その代わり、分散できる個々の出力は、ネフライトの方が小さい。総力としては等しいが、出力できる穴が多い分、ネフライトの方は大きな物に干渉できないようだ。
（ま、一長一短ってことだよね）
だからこそ、ジェダイトでは無理だった芸当が、ネフライトでは完成する。
春告は、腰のハードポイントに備え付けられている、ウィルゲムを取り出した。
予備として携帯しているウィルゲムの数は、二〇。
カドゥケウスに装着されている宝石がすべて砕けたとしても、あと二回、変身が可能になる数だ。
とは言え、宇宙空間や飛行状態での仕事が多い春告にとっては、

変身が解けた瞬間に死亡する可能性の方が高いのだが。
（今は、頼ろう）
ウィルゲムに。
自分を選んでくれた宝石たちに。
迫りくる、ミサイル群を迎え討つために。
「頼むよ！」
春告の手が、勢い良く跳ね上がる。
その手に乗せられていた宝石たちが、朝日を反射してキラキラと輝きながら空に散る。
（ネフライト！）
そして、春告は、願った。
ウィルゲムの確保を。
二〇の宝石への力の分散を。
直後、重力に逆らって飛び上がり、しかし重力に捕まって落下しようとしていた二〇の宝石のすべてが、放物線の頂点で、その身を固定された。
微動だにしない。
否、春告には見える。
二〇粒のウィルゲムは、すべてシャインダークから伸びる力の線で繋がっている。
その確認を胸に、春告は次なる願いを空に放った。
「空に、桔梗紋を！」
桔梗紋。それは陰陽師・安倍晴明が創出した、木火土金水の五行の理を図案化した、五点を線で結んだ図形。その形が桔梗の花に似ていることから名付けられ、後に在野に下ることで、創出者の霊験にあやかってセーマンと呼ばれた、五芒星。
春告の願いが、月長石に受け入れられ、ネフライトによって二〇のウィルゲムに力を分散、日長石から出力されて、現実へと変換される。
その頭上に翡翠（ひすい）を戴き。

その両肩に珊瑚（さんご）と瑠璃（るり）を。
右手の先には月長石（げっちょうせき）が輝き、左手の先に柘榴石（ざくろ）を見て。
腰の両脇には真珠（しんじゅ）と紅玉随（べにぎょくずい）。
股間の下に琥珀（こはく）。
両足の延長線上に瑪瑙（めのう）と日長石（にっちょうせき）。
その一〇粒を一セットにして、自分の周囲と、その更に外側に配置して。
空に、三重の五芒星が華開く。
一番外の五芒星の、頂点から頂点までが一キロメートル。それでも空を覆うには絶望的な小ささだが、各ウィルゲムが力に共鳴、増幅しあえば、その支配空域は成層圏まで届く……はず。
思いつきだ。
試験もできない。
だが、やらなければ、空に二酸化硫黄の膜が生まれる。
それで済まなければ、日本に悪意が降り注ぐ。
ミサイルを、爆発させずに、止める。
そのイメージを、春告は念じた。
ウィルゲムが、その想いに呼応して、明滅する。もしかしたら、その光のパターンで春告に会話を試みているのかも知れない。
「ありがとね。馬鹿につきあってくれて！」
宝石の言葉は分からない。
もしかしたら、非難轟々かもしれない。
けれど春告は、謝罪ではなく、感謝を皆に。
胸元のカドゥケウス、そこから伸びる力を通じて、溢れ出そうとする熱い流れを感じたから。
数千万年、数億年という長い沈黙を過ごしてきた宝石たち。想像を超越する気候変動や地殻移動を経験してきた古老たち。
その身に、無限とも言える知識を蓄えて。
今それを、一人の少年の想いのために、差し出そうとしている。
（有り難くて涙が出るよ）

春告は見る、己の上下左右を。
そこには、空に光線を結び、二重の五芒星を描きながら、内外が逆回転を始めているウィルゲムたちがある。
点滅しながら、春告が発した念を、更に大空へと広げていく宝石たちの直下では、遂に夜明けが、日本海を渡りきろうとしていた。止まることのない自転という地球の営みは、個人個人の想いや焦りなどに関わらず、ただ黙々と、夜を昼へと塗り換えるために己を周(まわ)す。
超々高から見下ろす朝鮮半島が、高速で陽の光に包まれた。
シャインダークのスピーカーを、此花(こはな)の通信が震わす。
「来たわ！　三二発！　西北西。タイプ、東風(ドンフェン)、スカッド！」
此花の読みが当たった。
東風は人民解放軍が、スカッドは旧ソ連が開発した、トラック運搬タイプの地対地ミサイルだ。
運搬車そのものが発射台を兼ねるそのミサイルは、機動力に優れた運用が可能な、旧式だが優秀な兵器だ。スカッドは北朝鮮の主要な輸出商品としても有名で、主に中近東で、近縁種が量産、配備されている。
だが、その射程は、日本全域を狙うには心許ない。
東風では日本海を越えきれないし、スカッドでも、中部地方までしか届かない。北朝鮮に本気で日本を爆撃する意図があるならば、スカッドを発展させた弾道ミサイルである『ノドン』で、首都を狙う必要がある。
つまり、
「二酸化硫黄か！」
視界が急速に歪む。
風を切り、空を蹴って、シャインダークは砲弾の勢いで宙を突き進んだ。
偏西風が壁となって前進を軋ませる。
目指すは半島の付け根、中華人民共和国との国境付近。

勝負は、速度だ。
「全・出・力！」
Gなど緩和しろ。
空気抵抗なんて無視だ。
縮地を。
テレポートを。
バイタルグロウブを見据えて飛び乗れ！
瞬後、シャインダークの姿が、ブレた。
通常の三倍のウィルゲムが、限界展開で最長辺五キロまで広がって空を占め、己とシャインダークの存在を入れ替えるという理屈を発揮。
点から点へ。
シャインダークを中心に共に跳ぶ五芒星が、展開するたびに、もっとも遠いウィルゲムとシャインダークの空間を強引に置換。
移動、展開、置換のルーティンワークは、徐々に早く、そして滑らかに春告の身を大陸へと誘う。
が、遅い。
すでにミサイルは発射されている。
相手の狙いが成層圏に二酸化硫黄を蒔き散らすだけなら、数分で事は済んでしまう。
故に、
「行けよやっ！」
春告は叫んだ。
願った。
最速を。
間に合えと。
理屈はどうでもいい。
結果だけを求め。
跳ぶ。空間を。
跳躍、展開、置換。跳躍、展開、置換。

跳躍展開、置換。
間隔が狭まっていく。
全てのウィルゲムが高速で明滅し、春告の『想い』を受けて最適解を導きだそうと演算を走らせる。
各結晶構造の固有振動数限界までクロックを上げたウィルゲムたちは、三〇粒を並列処理して、春告の『本気』を糧にオーバークロックを発動。
あらゆる可能性をシミュレーションしながら春告の想いを具現せんと、超振する。
跳・展開・置換、跳・展・置、跳展置跳展置跳置跳置跳置置置置……
そのルーティンが、限界を迎えた。
まず、跳躍と五芒星の展開が同時処理される。
展開とほぼ同時に、最遠距離のウィルゲムとシャインダークの置換がなる。
置換された瞬間に五芒星が展開……するか否かのタイミングで置換が発動。
ウィルゲムたちの超速演算が、やがて最小時間単位、プランク時間にまで迫る。
それは光速を意味する時間。
時空を制する原理。
絶対不可侵なる光速等速理論を、しかしウィルゲムは越える事を願った！
タキオンの領域まで加速せよ！！
そうでなければ、春告の『想い』は叶えられぬ！！！
ならば！！！！
越えよ、時空を！！！！！！
直後、シャインダークは、消滅した。
光速の領域に至り、ほぼ無限とも言える時間を得たウィルゲムたちは、その静止した時空で、ラプラスの悪魔と取引したのだ。

限界時間単位、プランク。
その、プランクとプランクの、狭間の利用を。
極限までゼロに近い時の……物体に電子、クオークという最小単位があるように、時間にも存在するプランクという最小単位の、その隙間にシャインダークを介入させる許可を。
極限までゼロならば、それをどれだけ足しあわせても物理的に意味のある時間にはならないという、屁理屈を付与して。
ウィルゲムたちは時空へ干渉する。

『シャインダークがミサイルを阻止するためには、発射直後の空間に、シャインダークが存在しなければならない』

故に。

『シャインダークが、その時間にその空間にいたことに、せよ』

因果律の逆転。
過程があるから結果があるのではなく。
結果のために過程が必要なら、必要な過程を捏造すれば良い。
辻褄なんて勝手に合わせろ！
間に合えば、他に、なにも、不要（いらない）！！
それが亜空間移動なのか、観測者不在ゆえの超光速実現なのか、イデア投射から成る存在確率操作なのか、空間折り畳み理論なのか、ワームホール設置なのか、外宇宙から飛来した超大型宇宙生物のチャクラが空に編んだオーガニック経路なのかは分からない。
ただ結果として、春告の想いをウィルゲムたちは具現する。
ミサイル発射直後の空へ、シャインダークを現出させて。
時空すら突き抜けて。
物理時空を支配する神は、シャインダークが因果律を満たしてそこに到達したのではなく、その時、その場所に『初めからあったモ

ノ』として、シャインダークを処理した。
逆巻かれる因果律に時空を乱されるくらいなら、因果律を無視する特例を与えて時空への影響を最小限に抑える政治取引。
だから、時は逆巻かれる。
ミサイルを阻止するために、春告はその場所に、いなければならなかったのだから。
「来たわ！　三二発！　西北西。タイプ、東風（ドンフェン）、スカッド！」
正当な時間を満たすために、此花の通信が定刻通りに春告の鼓膜を揺らし。
薺（なずな）から、ミサイル発射地点と、その予測経路が網膜に投影され。
「うぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！」
シャインダークが、吼えた。
既に五芒星は展開している。
二重の虹色の円を描いて回転するウィルゲムたちに、外宇宙からの超大型生命体が生んだ抗体（アンチボディ）が、計算高い政治家（ガバナー）が発射した核ミサイルを阻止したイメージを、春告が伝える。
「彼らが三機編隊でトライアングルを組んだなら！」
直後、ミサイルが向かう上空に、虹色の幕が生まれた。
「こっちは、五芒星だ！
チャクラ・ペンタグラム！！」
時差ゼロで、虹の幕に地対地ミサイルの群が突き刺さる。
それは物理的な壁として空を飛翔する物体に干渉せず、しかし空を飛ぶための燃料の燃焼という現象に介入した。
虹の幕に触れたミサイルの全てから、推進剤の光が奪われる。
のみならず、起爆に要する化学反応すら、弾頭から奪われた。
爆発できぬ、鉄の塊。
虹をくぐり抜けたあらゆるミサイルは、燃料を消費し尽くした物体へと強制的に変換された。
その際に燃やし尽くされた燃料から発生したエネルギーは、全てナノマシンで構成された虹の膜に吸収され、それはウィルゲムを通

じて時空の神へと、『シャインダークをこの空間に存在させた』辻褄合わせのためのエネルギーとして返済される。
大空を指向した飛翔体は、三二発、全て活動を停止した。
落下する。
不発に終わった花火が、人知れず夜空へ消えるように。
ミサイルたちが、望まれた役目を果たせず、眼下の海へと落ちていく。
「……やった……」
結果的にウィルゲムが選んだ方法が、人工物を無に帰すナノマシンの散布によるエネルギー吸収、だったが気にしない。
「やっ、た！」
全てのミサイルは沈黙した。
眼前の大地を凝視するが、第二波が放たれる気配はない。
そもそも、地上の人間に、ミサイルが停止した原因を推し量ることすら不可能だ。
あらゆる人工物を無に帰すナノマシンによる干渉など、まだ物語の内でしか語られない。
「やったぁぁぁ！」
喝采を大空に。
全身が喜びを放った。
出来るなどと自惚れていたわけではない。
この瞬間まで、春告は自分が生きていることすら忘れていた。
ただ、ミサイルを止める。
それを想うだけの部品に成りきっていた。
本気。
真剣。
無我。
だからこそ、ウィルゲムが彼に応えた。
自分の命すら顧みることを忘れた春告を、気に入ったからだ。
魔術成すガイアギア。

選ばれた者に力貸す意志持つ石（ウィル ゲム）。
それは……司馬春告だけに与えられた特権ではない。
春告もまた、此花にカドゥケウスを与えられた、いちオペレーターに過ぎない。
まして、この打ち上げ花火が、過去の此花が提案した残り火であるのなら。
この空間に、それが此花の遺志であることを示す者が存在しなければならない。
ガイアギア。
ウィルゲムによって具現化する、意志を現実に変換した鎧。
かつての此花に協力し、此花が消えた後もその計画を実行へと移すべく活動していた者。
同じガイアギアを操る、相対者。
果たしてそれは、
『警告！　地上から飛来物』
薺から注意が喚起された直後に、ミサイル発射地点から一直線に、春告を目指して飛び上がってくる。
カラフルで、無骨で、いかにも未来のサーキットカーか、宇宙を破壊する大帝に形状変化しそうな、ジェット戦闘機の姿をして。
「マスターメガ……」
最後まで口にする前に、それはシャインダークの視界を埋め尽くした。
でかい。
前回のアーノルドは、格好こそ宇宙生命体でも人間サイズだったが、今回のガイアギア（仮）は、サイズも含めて原作準拠だ。
（トランスフォーマーなのは此花の趣味なのか？）
どう間違っても人民解放軍の新兵器などではないことは自明で、
（中国なら、まずは中華キヤノンだよなぁ）
思う間にも、銀河（ギャラクシー）で軍隊（フォース）な破壊大帝に酷似したジェット戦闘機が、空中で軌道を変えてシャインダークの周囲を回り始める。

そこに、友好的な接触を求めるほど、春告とてお人好しではない。
だから、三重の五芒星は、展開したままだ。
先のナノマシンを本気で展開すれば、地上のあらゆる文明を破壊し尽くすことも可能だと分かっていればこそ、暴走だけはしまいと胸に深く刻んで、ジェット戦闘機の軌道を見据え……それは空気抵抗など完全無視して、全く重さを意識させないＣＧ的な表現のままに、滑らかに人型へと変形した。

第8話　激突の空！　白銀散る、超神速のドッグファイト

『カシュー』

此花（こはな）の呟きが、呪われた島の沙漠の傭兵王の名前を紡いだ。

「本当に現れるとはな」

その名に恥じぬ、ドッシリと重厚な声音は、味方にすれば頼もしく……敵に回せば根元に至るためにあらゆる死を収集して螺旋を矛盾させていたり、願望器たる絶対悪を召還するために黄金の王と契約していたりしそうで……常識から逸脱、もしくは常識を破綻させた人格が連想させられる。

（あれ？　味方でも、赤い蛙宇宙人だと思えば、真面目すぎて不遇なギャグキャラ？

それに英国所属の吸血鬼って、敵とか味方とかいう単純な括りを超越してたような）

芸域が広い！　などと感心している場合でもなく。

「さて、此花の使者よ。

すでに貴公の行いは我が輩達の目的を阻害してくれたのだが、なに、彼女は別として、我が輩としてはその手腕、大いに気に入った。で、だ。こちらに参じる気はないか？」

落ち着いた、一言一言をジックリと口の中で熟成させる話し方が、外見にそぐわない。その見上げるほどの巨躯は、春告のイメージの中では、問答無用の悪だ。

恐竜形態のコミカルな芸風ならば親近感も湧くし、最古の拳銃タイプでも懐古補正も利いて話が通じそうに感じられるが、眼前の三段変形は、ガチで敵だと身構えさせられる。

アーノルドの時は警戒の意味での沈黙だったが、今回の沈黙は、交渉拒否の意図を込めて、意識的に敵対を主張した。

既に、春告は此花を依怙（えこ）すると決めている。

相手にどんな思惑があるのか知らないが、日本とアメリカを刺激

する花火を上げるような組織が、真っ当であるとは思えない。
『また、逃げろ？』
春告は問うた。
主の意向を。
『安心して、ハル。
カシューからは逃げられない』
『此花！　ハル君、危ないことはやめて！』
此花との会話に、薺（なずな）のチャット文がリアルタイムに割り込んでくる。
初めて薺に、ハル君などと呼ばれた事にときめきながら、しかし春告にも、此花の言わんとしたことが分かっていた。
ここで逃げたら、繰り返される。
ミサイルは両国に、何百発とあるものだ。
特に配備が古かったものであれば、理由と金さえあれば、廃棄という名目で両国政府と交渉することも可能だろう。
国家の軍事に介入できる相手との対峙。
一体此花とは何者で、その過去に真に何を思って活動していたのか。
そして、それを受け継いでいるアーノルドやカシュー達は、一体どれほどの実力を秘めた組織なのか。
分からない。
なにもかも。
ただ分かるのは、春告は彼らの行動を、生理的に受け入れることが出来ない。
それが過去の此花の発案であろうとも、今の此花の活動とは、理念の部分が根本的に異なって感じられる。
それが何かを言語化できるほど、春告にも整理は出来ていないのだけれど。
地球が熱いのなら、とりあえず冷やせばいい。
そういう、短絡的な意図が、ありありと見て取れる。

確かに現時点において、先進国と呼ばれる国しかり、世界的に見て環境問題が真剣に危惧されているとは思えない。
特に、エコという言葉が、単純な商品アピールに乱発されるようになってから、その理念は拝金主義に黒く染められ、結局のところ消費は拡大しなければならない、という商業原理から抜け出せていないと、春告には思える。
が、んなことはどうでも良いのだ。
おそらく此花も、そんな経済界に対抗して活動しているわけではない。
スペースデブリの掃除も。
大気中の二酸化炭素の回収も。
北極に氷を張ったことも。
すべては彼女が信念が発端であり、金儲けなんていう俗な理由からではない。
それは、人のためならず。
陳腐だと、古典的だと言われようとも。
ただ、未来の地球のために。
少なくとも春告は、そう信じた。
だから、此花を依怙しようと、決めた。
その此花は、過去の自分を否定する。
安直に、最も手早い簡単な方法で、地球気候に介入しようと言う想いを拒絶する。
春告は、その此花の想いを代弁するなどという、越権はしない。
ただ、己の言葉で、言うのみだ。
「空を、汚すな」
「よかろう。
その返答に、最大の敬意を。
さぁ、闘争の幕開けだ。
疾く、逝ね」
カシューは再び、戦闘機形態へと己を変じると、一度シャインダ

ークから距離を取った。
それが戦闘準備であることを、疑問にも思わない。
（どうする？）
相手はＭＳサイズだ。その攻撃方法が飛び道具であれ、体当たりであれ、破壊力に特化していることは間違いあるまい。
（とにかく、当たるな！）
空戦の常識。
相手に後ろを取られるな。
航空力学を強引にねじ伏せる代償に、戦闘機というものは己の真ん前にしか攻撃できない。
故に空戦とはほとんど、位置取り合戦だ。
それも、単純に速度が大きければ良いというものではない。
空気がなければ飛ぶことも出来ない戦闘機は、しかし空気を斬り裂いたことで生じる気流の乱れに翻弄される。
その速度が大きければ大きいほどに気流の影響は凄まじく、ほんの少しの挙動のミスで、空気抵抗に機体を捻り切られる可能性もある。
故に、ドッグファイトにおける手札は限られており、機体の制御技術も去る事ながら、相手の心理を読み切って、次の手札を予想することこそが、勝利の鍵ともなる。
それが、本来の空戦ならば。
「くっ」
そして、真っ正面から体当たりを敢行してきたカシューを、シャインダークは、真上に避けた。
気流も、重力も、慣性も、何もかも無視して。
戦闘機もそれを弁えている。
どんな無茶な機動も、それが機体本体の強度限界を越えない限りは、ウィルゲムたちが補正してくれる。
だからカシューは、最低旋回で戻ってきた。ほとんど速度を殺すことなく。

「危ねっ！」
今度は背後からの奇襲だった。
薺のオールビュー援護があるから避けられたが、相手はマッハを越えた轢き逃げアタックを仕掛けてくる。
コンマ以下秒の躊躇いで、春告の肉体はミンチと化すだろう。
（どうする？）
ウィルゲムは、確かに無限の道具だ。
明確な願いさえあれば、先ほどのような無茶も叶えられる。
この空間に虹色のナノマシンを散布すれば、それだけで相手の機動を奪うことも可能かもしれない。
（けど、相手もガイアギアだ）
巨大で、変形機構を有して、おまけに冷徹で容赦ない。
確実に相手を捕らえられる策を用いないと、裏をかかれては一瞬で生死が分かれる。
（どうする）
避け続けても、燃料切れは期待できない。
かといって、千日手を維持できるほど、春告は自分を信じきれない。
単純な体当たりが、何よりも確実な脅威だ。
カシューにはこちらを、なぶり殺す準備がある。
少なくとも相手を殺すという意味において、彼に躊躇いは見られない。
（できるのか？）
命のやりとり。
本気の闘争。
生身の喧嘩もしたこともない自分が。
（けど！）
やるしか無いと、春告はウィルゲムに念じた。
シャインダークを中心に二重に展開した五芒星の、その内側がすべて彼の前面に移動する。

受ける。
受けてやる。
カドゥケウスが光り輝き、五芒星の前面の大気が急激に圧縮される。
その向こうに、戦闘機の威容が迫ってくる！
（怖ぇ！）
暴虐の塊が、見える範囲すべてを埋めた。
ドガガガッと硬質な衝撃音が、轟き、
「うわっ！」
シャインダークが成す術なく、受けた衝撃そのままに後方へ吹っ飛ばされた。
（受けきれないっ！）
シャインダークのステイタスをモニターしていた薺から、衝突の衝撃と、それに対抗するウィルゲムの強度の情報が来た。
超高速で空が流れる。
大気を全力で押し退けて、全身が風の暴威にもみくちゃにされる。
欠けたウィルゲムこそ無いが、三〇粒をもってしてもカシューの突撃を相殺できなかった。
『バカか、お前は！　カシューの武器はあの巨体と重量ぞ！　物理的破壊力において、生身で立ち向かえるものか』
『それは……実感したよ！』
意識をハッキリと持つ。
まずは、自分を立て直さないと。
その瞬間……春告は眼下に、空中に留まっている三二発のミサイル群を見た。
（落下してない！）
カシューの仕業だろうか。
それ以外に、地球の重力へ反逆を成す理由はない。
（計画を、貫くつもりだ）
カシューが上空へ駆けつけた真の目的が見えた。

それは、万が一不発に終わった場合の、ミサイル爆砕の実力行使だ。
己自身が計画実行の保険。
春告がこの空域から離脱した途端に、確保したミサイルは全て強制解体されるだろう。
（ここまで来て、んなことされて、たまるかよ！）
意志を、前へ。
制動をかけて姿勢を取り戻した春告に、間髪入れずに薺からの警告が舞い込む。
それは、カシューの追撃の報せであり、
（九頭龍……！）
予想進路は、上下左右袈裟逆袈裟、そして正面！　神速ゆえに前面のどこからでも春告を襲いうる悪意の突貫に、
「ウィルゲム！」
春告は、全宝石を迎撃に回した。
今更回避は間に合わない。
かといって、力による相殺が無理だということは、既に体験している。
故に、シャインダークは二重の壁を前面に最大展開した。
激突が生じる。
大気を圧縮して固形化させた先とは異なり、可能な限りの柔軟性を持たせた大気の塊に、戦闘機がくるまれていく。
が、それで殺しきれる勢いではない。
あくまで、その速度を数パーセント、肩代わりするだけだ。
本命は、第二壁。
「どこに消えた！」
カシューは己の前方に、虚空が広がるのを見る。
そして春告からは、戦闘機が自分の正面を、全く速度を減ずることなく、直角にカーブしていく様が見えた。
ウィルゲムに限定空間で重力子を発生させ、シャインダークの前

面の空間を強制歪曲させた結果だ。
カシューはもちろん、ただ直線したに過ぎない。
空間そのものが湾曲していては、どんな速度と威力を誇ろうとも、光すら曲げられるのである。
だが、
（こんな方法で、勝てると思ってるのか！　春告！！）
春告の頭蓋内に、強烈な怒声が轟いた。
此花ではない。
薺なはずもない。
ふきのでも草香でも近衛でもないその声は、己の内側から生じたものだ。
二度目。
二度目の声。
先日、アーノルドとの対決を決意した時、春告の原動力となった声だ。
（誰だ？）
あの時は夢中で、疑問を疑問として取り上げなかった。
ただ、己の中の闘争本能のようなものと、勝手に解釈して体当たりを敢行した。
此花に逆らっていた、という状況の余裕のなさもあって、何より戦闘そのものが短時間で終了して、その後に長時間の気絶を挟んだ春告の記憶から、優先順位を奪われて忘れてしまっていた。
（誰なんだ、お前？）
だが、今、ハッキリと自覚する。
これは、別人だ。
自分でない誰かが、自分の中にいる。
（俺に代われ！　お前の属性じゃ、他人を傷つけるのは無理だ！　お前は他人を救え！　排除は俺が担当だ！）
ナニヲ、イッテイル？
空気を震わさない轟き。

完全に内面世界の相手。
己とは似ても似つかぬアイデンティティ。
（誰なんだ！　君は！）
（俺は、蘇芳（すおう）だ！！）
春告の絶叫は、蘇芳と叫ぶ爆音にかき消された。
まるでロックバンドの隣で、ハーモニカの生演奏でもしているような、自己主張の格の違いが、存在感の圧倒的な力差がある。
蘇芳と叫ぶ相手には、覚悟がある。
この場を乗り切るための、相手の排除を躊躇わない、意志の強さが。
己を絶対に迷わない信念が、この声には込められている。
（春告にあいつは倒せねぇ！
お前には、他人を排除するだけの『己』がねぇ！）
それは、誰よりも春告自身が自覚していることだ。
わがままを、己の意志を押し通すことは、司馬春告という少年の存在の対岸に位置している概念だ。
だが、春告は叫ぶ。
（正義の味方に、そんな強さは必要ない！）
（何が正義だ！　このオタクが！
てめえも長年オタク稼業に浸ってれば、単純な勧善懲悪じゃ世界を語れないってことぐらい、常識レベルに染み着いているだろうが！）
グッと、黙らざるを得なかった。
勧善懲悪――そんなスッキリさわやかなテーマが失われて、一体何年が経っただろう。
正義の味方を自称する少年が、命を懸けた闘争の中で最終的にその正義を否定される、というテーマ自体が、もう手垢にまみれ始めている。
海外では宇宙の正義にすら祭り上げられている生誕三〇年を迎えた巨大ロボットのとあるシリーズですら、

（一作目はともかく、二作目じゃ、ジェノサイド側に回ったからなぁ、主人公）
春告があの作品から学んだのは、宇宙鯨なる魅力的なテーゼを最終回まで投げっぱなしにするのはダメだっていう事と、
（正義に力は必要だけど……力づくの正義は危険だよな）
果たしてそれを主人公の行動から知らされるのは正しいのかと激しく疑問に思うが、強引に押し通される暴力は、その根底にどんな思想があろうとも『悪』と呼ぶべきじゃないか、と子供心に深く刻まれたものだ。
（正義だなんだなんていうのは、結局言い訳だろうが！
お前が信じた正義なら、どんな障害があってもはねのけて貫け！
その結果として、相手が傷つくのは当然だ。責任だ。負うしかねえんだ！
身内を幸せにするために、無関係な敵をぶっ倒す。
それが世間の、正義ってもんだろうが！）
そう、結局、そこに行き着いてしまう。
組織のためには戦えなくても、仲間のためなら、恋人のためなら命を張れる。
昨今の正義の逃げ場は、そこだ。
結局、誰かを傷つけること前提で、守る対象の優先順位を決めないことには、迂闊に動くことも許されない。
それを、覚悟と、皆が言う。
でも、それでも、春告は食いついた。
（それは、物語の目指す正義とは違うっ！）
（ったりめえだろうが！
勝手に理想に生きてろ！
妖精みたいなお前にゃそれがお似合いだ！
だから、現実は、俺が引き受ける！！）
強烈な波動が春告の意識を震わせる。
目眩に似た視界のブレが、全身に襲いかかった。

（本気で、乗っ取るつもりか？！）
二重人格？
ジキルとハイド？
僕はいつから、乖離性同一性障害なんていうＰＴＳＤ的疾患に取り付かれていたんだ？
分からない。何もかもが。
そんな混乱に拍車をかけるように、春告の視界の端で、予想外の変形をカシューが成していた。
（フォーミュラーカー形態！）
あろう事か、敵は空中で、四輪のタイヤを駆動させていた。先の春告の防御壁の応用か、空間を超圧縮して空気の摩擦をタイヤの下に生んで、天駆ける龍の如く、読んで字の如くの轢き逃げアタックをシャインダークに見舞わんと迫ってくる！
（か、壁を！）
（防戦一方で、勝てるわけねえだろうがっ！）
瞬間、春告は、己を外から見た。
あれ？　死んだ？
しかしまだ、カシューの体当たりに巻き込まれたわけではない。
しかし自分の意識は、完全に肉体から剥がされている。
（蘇芳に乗っ取られた！）
それが覚悟の違いなのか。
単なる覇気の差なのか。
現実として春告の意識は空を掻き、肉体の制御権を完全に奪われてしまった。
だが。
（あれ？　うぉ？　なんじゃこりゃ！
おい、手ってどうやって動かすんだよ！
っていうかこれ、重えよ！　肉体！）
困惑する蘇芳の喚きが耳元でうるさい。
その混乱っぷりから察するに、どうやら肉体の制御権を奪ったも

のの……生まれたばかりの赤ん坊の如く、ＯＳの最適化がなされていない人型兵器の如く、骨と肉からなる有機体を動かすだけのノウハウを、蘇芳は持っていないらしい。
それだけでなく。
（おい、こら！　カドゥケウス！　解けるな！）
春告は、自分を覆っていた銀色の装甲が、一瞬で霧散したのを見た。
仕方がない。
ガイアギアは、春告の念を得て駆動するものだ。
多重人格の場合の意識構成がどうなるかなんて想像したこともなかったが、どうやら肉体の制御権を失うと、脳波の発生にも影響が出るらしい。
故に、春告の念を失ったカドゥケウスは、力の源を奪われて、その維持を放棄した。
極寒の空に、春告の肉体は生身で放り出される。
そして当然の如く、地球の引力の手が、春告の五体に絡みついた。
落ちる。
真っ逆様に。
それが幸いした。
２秒後に、カシューが猛スピードで、上空を走り抜けていったからだ。
などと、安心していられない。
カシューの乱した気流に巻かれ、落ちる。
地上へ。
生身のまま。
当然、パラシュートなんて背負っていない。
（くっそ！　なんだよ、これ！
動けよ！　反応しろよ！
今動かなかったら、意味ないだろうが！）
肉体は直立不動だ。

自律神経は生存機能を満足させているだろうが、どちらにせよ、このままガイアギアを発動できなかったら、地上か海面に叩きつけられて、春告は即死する。
（どけっ！　バカ！
僕が死んだら、お前だって死んじゃうだろうが！）
これ以上静観できなかった。
我武者羅にならなければ、強引にでも制御権を奪わねば、容赦ない死が待っている。
（くっそぉぉぉぉ！
だが、忘れるなよ、春告！
お前には、信念は、貫けねぇ！）
（負け惜しみはいいから、とっとと肉体譲れよ！）
雲を貫いた。
日の光に余すところ無く照らされた日本海が、青々と大きな顎を広げて、春告が落ちてくるのを待っている。
実際にはまだ、千メートル以上の猶予があるのだろうが、しかし春告には、その青さが手が届くほどの近くに感じられた。
感触が！
風が痛い。目が痛い。耳が痛い。つか寒い。すっげぇ寒い。身動きとれない。
（ウィルゲム！）
念じた。
応じが来た。
カドゥケウスが光を放ち、春告の身を白銀の薄金が覆っていく。
だが、それでは足りない。
春告の周囲では、まだ二〇粒のウィルゲムが自由落下を謳歌しているはずだ。
（ネフライト！）
その全部を、認識している時間はなかった。
春告の願いは他の宝石の確保を叫んだが、それも自分の肉体が制

御できていれば、の話だ。
自身の落下の制御に、相当の力が配分されたのは間違いない。
動きが緩やかになり、遂に空に静止したのを感じた時、春告は己の周囲に浮かぶ宝石が、一〇粒に減っているのを感じた。
（一〇粒、海に呑まれたのか）
もちろん、死ぬよりマシだ。
マシだが。
（一体、どうしてこんな目に）
蘇芳の絶叫がまだ、耳元に残っている。
あの強烈な刺々しい熱量が、自身の中で眠っている。
（そんなことより！）
春告は空を見上げた。
雲に閉ざされて見えないが、しかしまだ、カシューと三二発のミサイルが、あの空間に残されたままだ。
（行かないと！）
『避けろ！　春告！』
此花の叫びが、鼓膜を殴打した。
疑問の声すら、上げる間もなく。
背後からの衝撃が、春告の全身をぶっ叩いた。
咄嗟のことに対応できない。
水面に水平に、猛スピードで空をかっ飛んでいることだけが分かる。
（……あれ、は？）
春告から見て足下の方向に、緑色の人影を見つけた。
それは光を反射する滑らかな光沢に全身を包まれて、それでいて背中に生えた巨大な翼と、両腰からスカートのように伸びた装甲板が、空にXの字を描いている。
全身にスマートで、流線を繋いで編まれたシルエットが、女性の持つ柔らかさを前面に押し出している、
（仲間の……ガイアギア？）

カシューのバックアップに待機していたのだろうか？
迂闊だ。
相手が一人でいるなんていう保証はなかったのに。
『ハル！　戦場から離脱せい！』
金切り声に近い叫びが、此花の喉を震わせている。
『でも、まだ！　ミサイルも残っているのに！』
『ええい！　こんどばかりは問答無用じゃ！　薺、草香！　カドゥケウスを発動せい！　強引にハルを連れ戻すんじゃ！』
直後、シャインダークの周囲が、外部からの力場で繭のように包まれた。
『な、何をするんだよ！』
『今は、とにかく、帰って来い！
天都（あまつ）は、お前が相手にするには早すぎる！』
『そんな！　だってまだ！　ミサイルは排除しきってないのにいいいいいいいいいい！』
春告の絶叫が、孟夏の日本海に、長い長い尾を引いて……やがて日本列島の方向へと、小さく、儚く、消えていった。
緑色の女性型ガイアギアに、直立不動で見送られて。
それから五分後、三二発のミサイルの誘爆が、日米両国の監視網によって捕捉された。
両国政府は、ただちに大統領と首相による正式な抗議を表明した後、国連での制裁決議に向けた裏工作を模索。
中国政府は日米両国の抗議を受けて、二時間後に、声明を発表。
「今回のミサイル打ち上げは、ジェット気流の流れを詳細にトレースする発信機の打ち上げという科学的な目的であり、軍事行動には当たらない」
その日の午後には、アメリカ国防相から、
「国際合意のない測定器の大気中への散布は、その目的の如何に関わらず、他国の領空侵犯に当たる危険性がある」
とする、強気の発言が飛び出し、国際世論が一斉に硬化した。

その発言に対する、北朝鮮政府の正式声明もまた、決して妥協を許さぬものだった。
「領空侵犯というのならば、当国の軍事施設を人工衛星で盗撮する行為もまた、領空侵犯に他ならない。我が国は全世界に対して、あらゆる人工衛星の当国上空への侵入を非難するものである」
そのまま、この件は時の流れに風化する運命を辿る。
米国本土において、中華系ロビィストによる連邦議会への圧力が増したためだったが……折り悪く北大西洋上に、カテゴリー5へ成長する危険性のある巨大ハリケーンの発生が確認され、全米の興味は瞬く間に、メキシコ湾岸における被害回避へと集中したためでもあった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0568h/

地球輝甲シャインダーク

2010年10月10日10時30分発行